無料体験版　　蜘蛛巣村

001　蜘蛛巣村へようこそ

　村井靖夫はもう五時間もカローラのハンドルを握り続けている。どんよりと低く垂れる雲は梅雨のこの時期特有の暗鬱な暑苦しさをしていたが、なんとかもっていてくれるので運転に余分な労力を使わなくてすむ。車は甲信越地方の山間の国道からややそれて、地図によればそれが日本海へ通じる近道らしい県道へ入っていた。窓外に流れていく景色は意外と短調だ。道の脇にはのどかな果樹園の樹々が続き、遠くには灰色の雲に山頂付近を隠されている山の峰がうねっている。もうかれこれ一時間以上、こんな風景であった。
　助手席に坐っている妻の真樹は飽きずに視線を外に向けている。黒の薄い半袖のＴシャツに洗い晒しのジーンズのラフな服装だったが、真樹の美しさにはちっとも翳りはなかった。ショートボブのカールした毛先が素敵に尖ったあごの付近で揺れている。キラキラと輝くような黒髪は三十二歳の人妻のヌメ光るような肌の白さとよく似合っている。ほっそりした首筋から胸もとにかけて光沢は艶があり、透明感があり、吸いつくような肌理の細かさがある。Ｔシャツの胸が巨きくふくらんでいる。真

樹は成熟したこのバストを小さめのブラジャーの中にギュウギュウ詰めこんで小振りに見せようとしているのだが、そんな努力が無意味なようにムチムチとした弾力感を連想させるＤカップであった。窮屈そうに坐っているので伸びやかな下半身がわからないのは残念だったが、ぴっちりと腰にフィットしたジーンズははちきれそうな脚線美のラインを見せつけてくれる。
　こんないい女を裏切って不倫に走っている自分に、靖夫は強い憤りを覚えていた。魔がさしたという他はない。会社のピチピチとした若い娘についフラフラとして幾度か情交を重ねたのち、オフィスラブにありがちな感情のもつれへと発展してしまった。甘い遊び気分は吹き飛び、愛人に対する熱は一気に醒めたのだが、未練半分嫌がらせ半分の彼女の恐喝的な誘いについズルズルと従わされてしまい、今だに関係を清算できずにいるのだ。これ以上、このままでいればいずれ会社でも噂になるだろうし、聡明な妻がいつまでも気がつかぬはずはなかろう。いや、すでに彼女は薄々感づいているのではないかと思う時がある。すべての疑惑を胸に呑みこみ、夫の行動をじっと注視しているのではないか。陰険ではないのだ。真樹はそんな女ではない。靖夫を最後の最後まで信頼して結局は自分のところに帰ってくると、大きな自信と深い愛がこもった視線を背中に感じるのである。自分の気持ちを整理して精神的な踏切りをつけるために思い

ついたこの小旅行を提案した時の真樹の喜びようといったらなかった。まるで子供のように飛び跳ねて明るい笑顔を満面にたたえていた。靖夫の胸に抱きつき、何度もキスをしてくれた。たかだかドライブに毛のはえた旅行にこうまで喜ぶ妻の姿に靖夫は心臓をえぐられような呵責を覚えたのである。

　退屈な田園風景を切れ長の瞳を薄くあけて眺めている真樹。ルージュののった肉感的な唇が柔らかく微笑んでいるようだ。

　「あなた、疲れたでしょう？」

　突然、真樹が口を開いたので靖夫は憧れの女友達に話し掛けられた高校生のようにどぎまぎしてしまう。

　「ン？　うん、そうね――」

　慌てて答えを探す夫に妻はフフと軽やかに笑った。

　「どこかで休憩でもとりましょうよ」

　まだ今夜の宿のチェックインには時間があるし、どこか小綺麗なドライブインでも見つけて食事をし、少し休みましょうといった。

　「私、少し横になりたいわ」

　「どうしたの、気分でも悪いの」

　違う、と小さい声でいうと真樹は口元を悪戯っぽく微笑ませた。そしてシフトギアに置かれた靖夫の手に自分の綺麗な手を重ねる。

　「あなたも一緒に横になるの。私、なんだかそういう

気分なの」
　「……」
　いつにない真樹の積極的な言動に靖夫は少し驚いて彼女の顔を見た。瓜実顔の美貌がほんのりと赫らんでいる。自分でも羞恥を感じているらしいが、だが前言を撤回したりはしなかった。かえって強く握ってくる。
　「――そう、そうだね。僕もなんだがそういう気分だ」
　夫婦は艶っぽい笑い声をユニゾンさせたが、靖夫はふと目頭がジーンと熱くなってくるのを覚えた。
　（真樹、やさしんだな、お前って女は本当に）
　やはり俺にはこの女しかいない――悔悛の思いが改めて、しかしこれまでとは比べものにならないほど強い確信となって靖夫をとらえた。
　「よーし――」
　抱くぞ、思い切り！　と叫びそうになったが後半は慌てて呑みこんだ。代わりに、
　「とにかく場所を見つけなきゃ」
　夫を見つめながら、真樹は心から嬉しそうに笑っている。
　数分も走っていくと道幅が急に狭くなった。そして舗装道路が終って砂利道になってしまった。
　「おかしいな。間違えたのかな？」
　県道がこんなわけがないよな、と靖夫は激しくブレる

ハンドルを握り直して前傾する。地図を広げて覗きこんでいた真樹は首をかしげた。
　「これでいいはずなんだけど……」
　「おっ、こっちの道はしっかりアスファルトだ」
　靖夫が指さしたのはＴ字路として砂利道にぶつかっている二車線の道。道は小高い山へ昇るように続き、深い切り通しに続いているようだった。
　「地図にはでてないけどな」
　と真樹。違えばまた戻ってくればいいさと靖夫はハンドルをそっちの道へ切った。
　「新しくできたバイパスかもしれない」
　トンネルのような切り通しをフロントガラス越しに見上げながら靖夫はいった。
　「それならいいんだけど……」
　やや不安げな妻だ。車は長い切り通しをようやく抜けた。高地特有の針葉樹が両側に高く生い茂っている。
　「あら、あそこに、ほら――」
　真樹が示した方向にロッジ風のお洒落なデザインの建物がたっている。車も二三台、駐車していて『軽食休憩』の看板がカラカラと風に回転している。
　「村営レストハウス……村おこしってやつだな。しかし　村の名前が書いていない」
　たしかにそれは不思議だ。地図によってもこの辺に村が存在する記号はなかった。新しい道などは掲載されて

いない可能性はあっても、村とはいえ一自治体が落ちているケースは少ないだろう。
「まあ、いいさ。ちょうど良さそうなところなんだ。あそこに入って様子を尋ねればいいんだから」
思わせぶりに二ヤつく靖夫。些細な疑念も夫婦の秘事の予定の前では掻き消えてしまう。卑猥な含み笑いをこぼす夫の手の甲を抓ると、真樹も大きく伸びをして、お腹空いたぁ、と小娘のように叫んだ。仰けぞった拍子にＴシャツがジーンズからはみ出し、縦長の臍があらわとなる。抓られた仕返しに、そのお腹を軽く叩いた靖夫は駐車場に車を入れた。真樹はトンボ風の大きなサングラスをかけた。たぶんここでベッドインするわけだから、やはり女としては従業員の目が気に掛かる。
車を下りた二人。冷房がきいた車内から湿度の高い外へ一歩おりると、どっと不快な汗が吹き出してくる。
駐車場に併設されるようにちょっとした広場が小公園となっていた。そこにブロンズの銅像が立っている。老人の全身像で右手をすっと伸ばし、東の方角を指さしている。
「誰だ、これは。村長かな」
「違うわよ。ほら、国会議員の……」
なるほどその老人はこの地方選出の国会議員で与党ばかりか政界全体に隠然たる力を及ぼす大物である。当然、ダーティな噂が多く、東京のマスコミでは完全な悪

役だが、さすがに地元では影さすことのないご威光なのだろう。
　「なんだが感じ悪い」
　小声でいい首をすくめる真樹。女性的な潔癖性はこんな現実は気に入らないらしい。とにかく中へ入ろうと二人はレストハウスの扉を開けた。
　とたんに強烈なカラオケの騒音が二人を迎えた。音量がいっぱいで鼓膜が圧倒される。調子っぱずれの男の声が無理にこぶしをきかせてド演歌をうなっていた。通常の四人掛けのテーブル席が続いたいちばん奥に小上がりの席があり、そこで豪華なレーザーカラオケの装置を中心に日焼けしたむくつけき男たちが数人とぐろをまいて坐っている。汚れたタオルを鉢巻きにし、あるいは首に巻き、埃まみれの汗臭い丸首シャツと作業ズボン姿の男たちだ。その中の一人がマイクを握っていた。エプロンをした中年の女が一人、小上がりの端にサンダル履きの足を組むように身体を捻って男たちに輪に何やら野次を飛ばしている。靖夫と真樹は外観からは想像もつかない中の様子に入り口で立ちすくんでしまった。
　最初に彼らに気がついたのは中年の女であった。驚いたように立ち上がって、背後の男たちに手を振って促した。一斉に振り向く男たち。ド演歌は中断され、不思議な物でも見るように二人を注視する。
　「スイッチを切って！」

　女がきつく叱責すると慌ててカラオケの電源が抜き取られた。嘘のように静寂が取り戻されたが、まだ鼓膜の表面には独特のメロディがこびりついている。
　女がエプロンで両手を拭くように揉み手し腰を低くして近寄ってきた。
　「なにかご用でも――」
　近くで見るとかなりの歳だ。その皺やシミを猛烈な厚化粧で覆っている。
　「あのお、こちらでは食事はできますかね？」
　は？　と一瞬、靖夫の顔を見つめる女。突如、合点して一気に笑い顔となる。
　「ああ、お客さまですね。ええ、もちろん出来ます。なんでも出来ますとも！」
　どうやら久しぶりの客であるらしいのが偲ばれる。さあ、お入りくださいと二人の手をとって中へ案内する。中央窓際のいちばん見晴らしのいい席。女は小走りに厨房へとって返す。男たちはまだ無言のまま二人を見続けていた。いや、正確にいえば、視線は真樹のほうばかりに集中しているといっていいだろう。大きなサングラスで武装しているとはいっても美貌は容易に想像がつくし、プロポーションの良さは隠しようがない。田舎ではついぞお目にかからない垢抜けした美女なのだ。もっとも真樹と一緒に歩いていれば東京でだって男たちの視線は集中するから――むろんこんな明け透けなものでない

が――靖夫も慣れたものである。彼女を小上がりに背を向けさせるように坐らせて、あんぐり口を開けている男たちには軽く会釈してみせる余裕をみせつける。真樹のほうはさすがに苦笑以上の不快感を露骨に表情に表し靖夫に向ける。男たちの視線を背中に感じるのだ。薄いＴシャツを通して皮膚を刺してくる卑猥感。幾つもの視線が無遠慮に肌を這いずり回る。チリチリと背筋を撫ぜ、尾てい骨の辺りでとぐろを巻く。背中の産毛を一本一本かぞえられているような気味悪さ。やがて視線のピンセットはブラジャーのホックをつまみ、器用に外してしまう。きつい下着は柔かな雪白の肌にほんのりと赤く筋を作っているが、それすら欲情の炎へくべられる女の色っぽい現象なのである。貪欲な想像力はいずれ胸乳の形や乳輪の色までも鮮明に脳裏に映しだすのだろう。

　真樹はゾクッと身震いした。もう何秒か、中年の女がお冷やを運んでくるのが遅かったら、彼女は夫に退席を提案していたはずだ。

　「すいませんでしたねえ。驚いたでしょう」

　冷たそうな水の入ったコップをテーブルに置きながら女は顔をしかめて話し掛ける。どうやらカラオケの言い訳をしたいらしい。

　「みんな山や畑の仕事だから。こんな天気でしょう。それに村には娯楽がないし、ここが集会所みたいな溜り場になってしまって。村長からもきつくいわれてるんで

すけど」
　と、自分も輪に加わっていた事実をどこかに忘れて忌ま忌ましそうに男たちの方を向くのである。
　「あんたたちっ、いつまでボケッとしてるの。もう雨はあがったんだからさっさと仕事に行ったらどうなのよ！」
　足を踏み鳴らすようにした威嚇はここでの彼女の地位を示すかのように男たちの腰を浮かさせた。
　「いやあ、かまいませんよ」
　と靖夫は手をあげて制しようとする。
　「皆さんのお楽しみを続けてください。やめちゃう必要はないですよ。なあ？」
　同意を求められて真樹も驚いたように頷いた。
　「ええ、もちろん。楽しく聴かせてもらいますわ」
　心にもないことをいうのはいつだって女の役目である。気づかれぬように真樹は靖夫の向う脛を蹴飛ばした。
　「いいんですよ。朝からたっぷり歌いまくってたんだから」
　と女。男たちは次々に靴を履いて立ち上がった。未練がましい表情だが、すでに興味はカラオケなんかではなくなり、都会の匂いをふんぷんとさせて飛びこんできたこの美女の方である。もう少し凝視していればきっとパンティだって脱がせただろうに。尻の狭間に舌を差しこ

んで蟻の門渡りを舐められただろうに。
　「いいさ、いいさ。お楽しみは後にとっておくべ」
　誰かがいうと追従するようにひねこびた笑いが起こった。
　「なにさ、感じ悪いよ。あんたたち！」
　蝿でも追い払うように首に巻いていた汗拭きタオルを振り回して女は金切り声をあげる。男たちは挨拶代わりに美貌の人妻の身体へ露骨に好色な視線を飛ばしながらようやくレストハウスから退散していった。
　「御免なさいねえ。驚いたでしょう」
　中年女はメニューを手渡し、おもに真樹にむかってすまなそうにいった。
　「皆、根はいい人たちなんだけれど、田舎者でしょう。礼儀やマナーを知らないのよ。都会のあなたたちはびっくりしちゃうよね」
　彼女は標準語で話すようだ。その人好きのする語り口と腰の低さに真樹もしだいに機嫌を取り戻していく。
　「いいえ、かえってなんだか悪かったみたい。突然、飛びこんできちゃって」
　「まさか。かまうもんですか。ここはそういう場所なんだから」
　彼女は改めて自己紹介した。この村営レストハウスの責任者だそうだ。やはり靖夫がいったように村おこしの一環として村の特産品を素材に生かした料理を中心に見

本市もかねたレストランらしかった。
　「あなたがたが飲んでいるその水も一村一品なんですよ」
　と女主人。山の沢水で名水として売出し中だそうである。
　「なるほど、道理でおいしいと思った」
　靖夫はコップを手にとって水を覗きこみながらお世辞をいう。店長兼ウエイトレスは猪の肉が入ったもみじソバを推薦した。
　「狩ったばかりの猪だからね。イキがいいよ。たっぷり精がつくしね」
　女主人は思わせぶりにウインクする。
　「鼻息が聴こえてくるかも」
　と冗談のつもりらしいが、あまり愉快でない表現でいい、勝手に注文表に書きこもうとする。靖夫はそれで良かったが真樹は慌てて普通のザルを頼んだ。鉄砲で打たれる猪を想像しながらソバをすするのは御免である。
　「それから――」
　靖夫は厨房へ向おうとする彼女を呼び止めた。
　「ここは休憩室もあるんですよね」
　もちろんだと女主人はボールペンで天井を指す。二階と三階はユース形式の宿泊施設なのだ。長距離便のトラック運転手なんかが温泉目当てに立ち寄る場合が多いらしい。

「今はがら空きだから気兼ねはいらないよ」
「僕たち、まだ先が長いものだから、この辺で少し眠っておいたほうがいいと思ってね」
別に弁解する必要もないのだが、つい頭をかきながらいってしまう。これでは私たちはセックスしますよと宣言しているようなものだ。だが女主人もここではつまらぬ軽口もたたかず、ごく事務的に料金体系を述べただけで聞き流してくれたようである。三階のいちばんいい部屋を都合してくれると配慮を示してくれた。
「ところでこの村の名前はなんていうのかな」
ついでに尋ねると彼女は『浅草』とか『吉祥寺』とか『原宿』などと東京の人間が地名を訊かれて答えるように、何ら劣等感もなく無感動に――考えてみれば当然なのだろうが――いってのけたのだった。
「蜘蛛巣村ですよ」
厨房へ去っていく女主人の後ろ姿を見送りながら二人は驚きの表情を隠さない。『蜘蛛巣村』――そんな不思議な地名が日本に存在するなんて、ついぞ知らなかった。二人ともそれなりに教養もあるつもりだ。新聞やテレビのニュースもかかさずチェックしている。ユニークな地名がマスコミで流れるのは多々あるはずなのに、これはどこで聞き漏らしたのだろうか。
「まあ、八つ墓村より不吉ではないからいいか」
靖夫が彼にしては気の効いたジョークを口にしたので

真樹も緊張を解いた。それにしても不気味な名前である。ＣＩばやりの今日、もっとましな名前に変更できないのだろうか。名水の全国展開を考えているらしいが、『蜘蛛巣村の水』では消費者も二の足を踏むだろう。話題性を狙っているのだとしたら、それほど都会のマーケットは甘くないと忠告したいくらいだ。
　しかし今日の二人は特別な状況にある。野卑な男どもの無礼な視線も、憂鬱で気掛かりなこの村の地名も、彼らの感情の昂ぶりを押さえつけられなかった。靖夫はサングラスを外してコップの縁を薄いピンクのマニキュアを塗った品のいい白い指でなぞっている妻の美貌を眺めてぞくぞくしているのだった。センターパートの黒髪がやや火照った頬にかかっている。匂うような色香を感じさせる首筋から胸もと、そしてたわわなバスト……。ムラムラと欲情がこみあげてくる。豊満な妻の乳ぶさをギュウギュウいうほど握り締め、淡いアズキ色の乳暈をのせた先っぽから口一杯に頬張ってやるのだ。背骨が軋むのもかまわず渾身の力で抱き締めて痺れるほど舌を吸い上げてやったら、真樹、お前は新婚当時のように激しく昇りつめるのだろうか。
　結婚生活七年目だが、妻に対する久々の昂奮に靖夫は荒くなる鼻息を押さえるのがやっとだった。
　真樹にしても同じであった。夫の昂ぶりは肌を触れ合わせている時のように伝わってくる。しかしそれはちっ

とも不潔には感じられない。もっともっと私を見つめてほしいと思う。この唇もこのおっぱいもこのお尻もみんなあなたのものだわ、あなたの唇がしゃぶり、あなたの指が食いこみ、あなたのオチ×××がずっぽりハメこまれるのよ……真樹は思わず生唾を呑みこみ、脳天がチリチリと痺れてくるのに半眼になる。夫にのしかかられたら狂ったように四肢を絡めて抱きつき肩に噛みつく自分を想像して鼻の奥がツーンと熱くなる。跨ぐらと跨ぐらが重なり密着しあって右に左にクリクリと蠢きながら、二人の助平汗が混じりあい、陰毛の毛擦れの音がサリサリといい、そして出没する肉の棒に淫らに反応してマン汁がヌチャつく音が鼓膜から脳を犯すのだ。

　もうすでにブラジャーの中の乳ぶさは熱くしこっている。乳頭が勃起して痛いくらいに擦れている。真樹は靖夫に媚色を含んだ視線をネメつけた。靖夫の足が彼女の二肢を割ってき、内腿を撫で、股間のジッパーをすっとなぞった。思わず唇を半開きにする真樹。靖夫がその手をとって握ると手のひらに脂汗が滲んでいた。

　ソバが運ばれてくると二人は無言のまま物凄い勢いで食べはじめた。女主人がびっくりしてしばし足を止めたほどだ。それにもお構いなく、若い夫婦は一心不乱に食事時間の短縮をはかるべく咀嚼行動に専念する。

　食べ終わると、しかしさすがに女主人の目を気にしてゆっくりとソバの出来について語ったりしたが、靖夫に

とってはマン汁の味、真樹にとってはザーメンの味がしただけだ。
　さて三階の部屋に案内されるとそこは予想以上にこざっぱりした気持ちのいい印象であった。
　「眺めもバッチリよ」
　と彼女は――どうせすぐに閉め切られカーテンが引かれるのに――窓をいっぱいに広げてみせる。なるほど快晴であれば遠く奥羽山脈まで見渡せるようなロケーションである。二人は心ここにあらずといった心境で称賛し、感謝した。
　「ではごゆっくり」
　女主人が退室し足音が遠ざかって消えてしまうと、二人は顔を見合わせ、そしてひしと抱き合った。互いの火照った身体が服を通しても感じられる。互いに求めあっていた感情を再確認すると二人はいっそう燃え上がるのである。真樹の柔らかい頬に頬ずりし、ムチムチした身体を抱き締める。ほのかな化粧臭と甘い体臭がミックスした香りが鼻腔を擽ると、押さえていた欲情が一気に解放された。滑稽なくらいに大きな音を立てて首筋に点々とキスをしまくる。鼻面に触れてくる頭髪を掻きあげ耳を舐めた。
　「ハァー……」
　と淫らな息を洩らし、いっそう抱擁を強める真樹。もう我慢できないというように自ら細首を獣のように捻

り、夫の唇を求めた。鼻頭と鼻頭がぶつかりあうのもまどろこしく、唇を十字に重ねて吸いあい、歯と歯を鳴らす。真樹の粒の揃った象牙色の歯並びは唾液に濡れ、輝き、薄桃色の歯茎を晒している。女の甘い口臭と牝の熱っぽい喘ぎがディープキスをねだっている。舌を差しこみ、徹底的に舐めまくる。真樹も負けじと己れの舌を窄めて差しのばし、根が痺れるほど吸ってくれと挑発する。彼女の美貌は朱に染まったように紅潮してい、長い睫を震わせて切れ長の瞳を薄く開け、小鼻をヒクつかせて感じている。

　靖夫はいきなり彼女を横抱きにして持ちあげ、ベッドルームに突進する。ツインのベッドのひとつに彼女を投げ落とし、窓を閉め切ってカーテンをとじた。二人は先を争うように衣服を脱ぎ捨てはじめる。Ｔシャツを首から外すと真樹の髪がバサバサに乱れた。ベッドの上に立ち上がってジーンズのベルトを引き抜き、ジッパーをおろす。ブラジャーとパンティだけの半裸になった真樹の肉体――色の白さはどうだろう。下着のベージュ色が黒っぽくみえるくらいだ。フルカップのブラに包まれた双乳はボリュームたっぷりに実っている。ウエストのくびれから腰つきのラインはまさに年増女の色っぽさ。そしてパンティに隠された股間はむっちりと盛り上がり雄の目をそそらせる。太腿もそうだが全体的に結婚当初よりも肉づきが良くなっているが、それは満遍無く偏らずに

まぶされているので、プロポーションに多大の変化はなく、ただ女らしい丸みのようななおやかさが新たに印象として加わっている。ようするに女っぷりが上がったのだ。
　真樹は背中のブラのホックに手を回したが、すでにパンツ一枚になった靖夫に突き飛ばされるように押し倒された。火照った肌にシーツの冷たさが心地よい。靖夫の指がブラジャーにかかり強引に毟りとる。
　「ああ……」
　まだ一応、周囲を気遣う理性は残っているらしく喉を絞る悲鳴とも喘ぎともつかぬ声は小さめだ。ブルンとこぼれ出たおっぱいはまばゆいばかりに白く、張りがある。巨きな肉丘を保っている胸の筋肉はちっとも衰えていなくて、わずかなハの字に形を整えているのだ。今こうして仰向けに寝ているのに洋梨形を保持している。その先っぽにのった小さめの乳輪と尖端の乳首は若い頃のように桜の花びら色とはいかないまでも、まだ赤みを残しているし、ツンと突き出した乳首の形の良さときたら小憎らしいくらいだ。乳輪に浮き出たブツブツもちょうどいいくらいで、これがまた舐めあげた時の舌触りをえもいえぬものにしている。
　靖夫は妻を乱暴に俯せにひっぺ返し、双臀を覆っているパンティをずり下ろした。剥き卵のような肌質をもったヒップがブリブリと丸見えになる。丸くて豊満なお

尻。ここから毎朝一本の黒い糞塊がヒリ出されているとはどうしても信じられない美臀である。もう一度引っ繰り返す。牝猫のくせに両手を揃えてお碗の形にし、股間を覆う貞淑をみせている。だが靖夫が指を乗せるとなんの抗いもせずに両手が開かれた。逆三角形型に生え揃った漆黒の茂みはどちらかといえば面積は狭く、でもその中で濃密にひしめきあっている印象である。毛あしが長くてちょっと縮れがあるので、むっと淫臭がこもるような気もするけれど、艶があり、コシも強いから不快さはそれほどないのだった。

　その黒毛を左右にこびりつかせて一直線の女陰が小高い女肉に走っている。

　「真樹、少しチビっているようだね」

　その口の端に我慢しきれなかった牝の涎のネバつきを認めて靖夫がいった。

　「う、うン……」

　生汗がテカテカと光りだした顔を両手で押さえ羞恥に眼を閉じる。

　「嬉しいよ。真樹。とっても嬉しいんだ」

　靖夫は中指で下から上へ性器を擦りあげた。

　「あぅッ」

　甘美な電流が真樹の体内に走り、仰けぞるように重たげな腰部が持ち上がった。そのせいか、とじていたオ×××のあわせ目がぱっくりと開き、黒ずんだ襞の波とあ

ざやかな鮭肉色の腟道を覗かせたかと思うと、濃厚な性臭とともに一筋の汁がトロリとしたたりこぼれ、蟻の門渡りからおちょぼ口の肛門へ染みこんだ。ぽっちりとした肉芽もあらわとなり、そこは亀頭をほんの少し現した仮性包茎状態になっている。

「あ、あなた……お願いッ……」

靖夫の鼻先で淫らに腰がくねり出す。焦らすような視姦にはもうこれ以上耐えられない。右足の太腿のつけ根あたりに見慣れたほくろをみいだし、チュッと口づけすると先程よりずっと激しい身悶えを晒す妻に靖夫もまた刺激されて、弾かれたように彼女へのしかかっていった。

「ああ、真樹、好きだ！　誰よりも君が好きだよ」

と口走りながら双つのボインをわし掴み、力任せに揉みたくる。

「私も、私も！」

夫の積極性を跳ね返すかの如く、真樹は両手を夫の首に巻きつかせ、両脚で腰にしがみついた。しかしそれも灼熱の肉棒が急所にあてがわれると、あっという間に四散して、ただはしたない声を塞がんと彼の肩に顔を押しつけるのが精一杯となる。尖端が肉唇をこじ開けはじめ、挿入されはじめると腰に巻かれ組み合わされていた足の指が握りまがった。靖夫は腰を突き出し、名器の構造を十分に堪能しながら最奥をめざした。この時、乳ぶ

さを強く揉みにじってやるのがこの女にはたまらないらしい。これは性生活に馴染んできた最近の傾向である。女も三十をすぎるといろいろと注文をつけてくる。オ×××もおっぱいも愛する人のものだと心底感じられるから、と一応もっともらしい理屈をいうのだが、ようするにイイのであろう。若い頃はそうでもなかったはずで、しだいに好き者になっていく妻に少し驚く夜もあるのだが、今日はこっちも野獣だ。二人で思う存分色ボケすればよい。靖夫は先っぽがぷっくりふくれだすほど美乳の根を絞り、グリグリと指を食いこませ、トドメのひと突きとばかりズンと腰を迫り出した。

「うッ――」

真樹は一瞬、絶息し、全身の力と神経を股間に集めて腟圧を高めた。今度は夫が呻く番。いつもながら真樹のオ×××は締まりがいい。こらえ性もなく自失してしまったのは数限りないが、今日は男の沽券にかけても我慢しなければ……。真樹の攻撃をすかすように子宮に到達した棹をひとまず退却させ、さらに手のひら一杯に握っていた乳ぶさも離す。そして今度はその尖端で梅干しの種のように真っ赤に充血し硬起している双つの乳首を同時にぴんと摘みあげた。

「あーンッ」

恨めしげに涙に濡れた瞳をこちらに向けて真樹はイヤイヤと首を振る。激しい大波のような肉の刺戟を貪欲に

むさぼっていた年増女にここへきて微弱な電流を流すような乳首いびりは切なすぎる。しかし夫はニタニタと笑いながら人差し指と親指で摘んだ乳首をスッと持ちあげていくのだ。汗ばんだそれは重い肉の吊り鐘に耐えられるわけもなくゴムのように伸び切ってしまう。

「い、いやッ」

耳元で飛び回る薮蚊の羽音のように不快で気に障る刺戟。だが執拗に続けられると真樹の性中枢神経は焙られたスルメのようにチリチリと焦げついていく。

「巨きくていやらしいおっぱいだ。谷間は助平汗でベッチョベチョだぜ」

からかいつつ、摘んだ乳首を右、左と揺さ振った。同時に中途まで引き上げた肉棒でザラつきの密な腟の天井を擦りつける。うーンと鼻息を噴きこぼし、たまんない、とセクシーな擦れ声を発する真樹。両手を汗で化粧の落ちた顔に乗せ、浅ましい牝の表情を隠そうとするも、ときおり大口を開け広げて唾液のネバついた緋色の口腔ともっと奥の喉ちんこまで晒してしまうザマはまさに発情状態だった。指の腹が硬い乳首を揉みほぐすように擦りたててくると彼女の白いほっそりした指はそのまま頭髪の中に突っこまれてクシャクシャに掻き乱すのである。

ここまでくれば主導権はこっちのもの。もはや妻にさっきのような小癪な反撃の余裕はないと靖夫は己れの手

管に満足する。乳首を解放してやり赤ら顔に乗せていた彼女の両手を彼女の頭上にもっていって一まとめに掴み、腕に挟まれた格好のその顔に熱烈なキスをしまくる。そしてやおら起き上がり、豊かに成熟した腰を掻き抱いて結合を深め、ねっとりとしたローリングから追い上げてやる。

「ああッ、イイ……」

自らも腰を迫り上げ、美臀をシーツから離して夫のストロークにあわせる。ズン、ズン、と子宮を押しあげられるたびに、真樹は生汗にてらてらと光ったあごを仰けぞらせ、全身の血を逆流させる快美を自覚する。

見下ろす妻の裸体……ヌメヌメと助平汗に濁った乳白色の肌。痴呆のようにだらしない真っ赤な顔。ところどころにみえる小さな黒子。ウエーブのとれた黒髪。チリチリと逆巻く陰毛。隙間なく肉棒を咥える爛れボボ。断続的にキリキリと収縮しほどよく刺激的で、ほどよく従属的。すべてが素敵だ。どれも心の底から愛している。

（俺はやっぱりこの女から離れられない）

靖夫はピッチをあげていく。

「ううッ、も、もう――」

ごつごつと子宮が鳴り、肉の摩擦が最高潮。靖夫が真樹の腰を持ちあげねじった。弓ぞりになる裸身。ふたつの肉体は完全にひとつになって愉悦の痺れを交錯させた。心神を喪失させ色餓鬼になりきった二人は同時に咆

哮をあげ、夫は精液を解き放ち、妻は痙攣とともにそれを呑みこんでいくのだった。

　肉の陶酔からはやはり靖夫の方が早く目覚めた。まだ口も眼も半開きでうつつを抜かしている真樹の、毛穴がブツブツしたその頬にそっと口づけしてやる。夫婦の性生活としては久しぶりにお互いに満足する行いだった。妻の肌はまだ火照りがおさまらず湯上がりのように薄桃色をしている。凄絶な揉みを加えられた乳ぶさはいくぶん輪郭をまったりとさせていたがかすかな呼吸に上下する様は何とも魅力的であった。乳首は勃起したままだ。底から手のひらで持ちあげ、爪でそれを弾いてやる。その拍子に遠退いたはずのオルガスムが武者震いのようにとって返してきたのか、真樹はうっと呻いた。充血した瞳を開き、夫の顔を認めると嬉しいような照れたような微笑を浮かべる。
　「セックスしましたって顔をしてるぞ、真樹」
　「……いやね……」
　笑いあいながら二人は口づけをかわした。官能の終息を告げるはずの口づけだったのだが二度三度と繰り返すうちに燻っていた火が再び燃え上がってしまう。どちらが言い出すまでもなく、舌と舌との情熱的な絡み合いが延長戦を宣言するのだ。
　「逆さになってお股に顔を突っこんでチ×××と×××を

しゃぶりあおう、な？」
　乳ぶさをモミモミしながらとびきり下品な言葉でいってやると、真樹はボゥーっとした顔でこっくりと頷いた。シックスナインはそれほど経験があるわけでもないし、あまりにも生臭すぎる体位と行為は彼女のお気にいりとはいえなかったが、今はなぜか夫に従順でいたかった。彼とのまぐわいで昇天させられた自分に無性に幸福感を感じるのである。
　二人は互いの腰を抱いたままゴロリと引っ繰り返った。靖夫が下に真樹が上になる。肉交が終ったばかりの、不潔きわまりないはずの部分を彼に舐められ、私も舐めるこの行為は深く愛し合っている夫婦だからこそ出来るものなのだと、真樹は真樹なりに解釈するが、鼻先を覆ってきた男根と玉嚢のドアップにはやはりグロテスクを覚えてしまう。
　下になった靖夫は咽せるほどに色づいている彼女の跨ぐらを抱える。ムチムチの太腿の内側で両頬を挟まれた状態で靖夫はジュルジュルとしゃぶりはじめた。こうしてみる太腿のつけ根から尻たぶの盛り上がりの、肉の曲線が卑猥だ。
　「うン――」
　アヌスにまでザラついた舌を密着されると腰が浮き、背中が丸くなった。黒髪に隠れた顔を伏せ、媚肉に添って上下する舌技に耐える。

「狡いぞ、おれにばかり舐めさせて」
「ああ、御免なさい……」
真樹が躊躇していると靖夫が尻をピタピタと叩いてくる。羞恥と生理的な嫌悪感をふりきり一物と対峙する。しかし精液とマン汁の臭いを鼻腔一杯に吸いこみ、頬をまた赤らめた。それでも片手で玉嚢をやわやわと揉みほぐし、片手でしなった肉棒を掴んで扱く。そのカリ首の尖端にルージュの禿げ落ちた素色の唇を窄めてキスをする。股間から這い上がってくる淫靡な刺戟と男性象徴への深い畏怖が真樹の胸に諦念に似た甘酸っぱい倒錯の情欲を疼きださせた。人差し指で裏側の縫い目をなぞりつつ、玉嚢を離した片手で発達したエラのすぐ下をキュッと締めあげる。なんだかんだいっても好き者の人妻。ふっきれてしまえばやることはどこまでも淫らである。ついに真樹はずっぽりと尖端から呑みこんだ。どんな美貌の持ち主もこの時の顔のいやらしさときたらない。眦がさがり、鼻孔が縦長になり鼻の下が伸び、頬がふくらんだり凹んだり、おまけに顔全体が高熱を孕んだようにヌラつくのである。淫売、売女、牝犬――どんなに口汚く罵ってもいいすぎないだろう。美人妻、村井真樹も例外ではなく知性も理性も感じさせない色ボケ顔で尺八を吹き続けている。
誇張ではなく喉ちんこにあたるまで含み切ると男根の半分以上を口内におさめられる。たっぷり唾をまぶして

から唇をきつく締め、尖端まで仰けぞるように露出させる。それを繰り返すのは肉体的にかなり骨だが、いくら彼女が吸引力抜群の名器とはいえ口の方が力も動きも強くて複雑なのだ。靖夫はたちまち巨きくなりはじめた。苦労が報われると嬉しいものである。汗水くの三十女は肉づきのいい身体を震わせて行為に没頭していく。
　しかし残念なことに延長戦でもまた靖夫の攻撃の手が上回った。なにしろ遊び好きのＯＬと数多く手合せしている靖夫である。相手を歔かせる手管には一日の長がある。素人の専業主婦では腕を磨くわけにもいかない。襞の一枚一枚を丹念に舐められ、クリトリスの包皮を剥かれ、その合間に肛門まで弄ばれれば、真樹がたまらずチ×××を吐き出して涎と汗に口のまわりをギトつかせた顔を振りたくって苦悶を訴えるのはやむをえまい。
　「あーむ……駄目だわッ、そこ、あっ、そこッ、う……」
　嵩にかかって責め立てる夫の攻撃に真樹は巨きな尻を蠢かせて喘ぐばかりだ。それでも牝の本能からか握った肉棒は手放さず、必死に扱いている。
　「た、たまんないわ、あ、あな、あなた……」
　呂律も回らなくなってきた妻の悶えように靖夫は何だかサデステックな快感を覚えてしまう。弛緩しきって開けっぱなしになってしまったオ×××からはとめどない湧出が続いている。イビリすぎたか肛門も濃いアズキ色に

変わってきた。打てば響くように敏感に反応するこの女の肉体――靖夫はどんなにいい女を妻にしているか、今更ながら芳悦に浸るのである。
　猫がミルクを舐めるような、淫猥な音を共鳴させながら、この肉闘もクライマックスを迎えつつあるようだ。もちろん先にねをあげはじめたのは真樹の方である。全身、バケツの水をかぶったように助平汗まみれとなり、五体をバラバラにする肉悦にもう何も出来なくなって、ただ随喜の涙を流しながら肉棒に頬ずりしている体たらくだ。
　「イクわ、私、イッちゃうッ」
　いまわの言葉を涎とともに口走り、白目になって二度目の恥を曝け出した。
　「ううッ！」
　いつ聴いても女の一吠えは艶かしく、そそるものである。回を重ねればどうしたって男の方が身体は重いが、今日は特別なのだろう、靖夫も妻の断末魔を股間に思い切り感じて一緒に果てた。肉棒の尖端から二度目とは思えない量のザーメンが噴出し、気死寸前の真樹の美貌に飛びかかった。額に眉に鼻に唇に、そしてあごには糸を引いて垂れ下り、精液は美貌を汚し切ったが、その濃厚な臭いに脳を痺れ切らせて唇のまわりの白濁を赫い舌で本能的に舌なめずりする牝性を発揮するのであった……。

　バスルームは通常のユニットバスを一回り大きくした程度のものであったが、女主人が　説明したとおり、湯はかなりの温度をもった温泉である。真樹はシャワーだけにしておくつもりだったのだが、靖夫にもすすめられて湯槽に肉交のあとの消耗した身体を沈めていた。頭髪をピンで後頭部にだんごにまとめ、素敵なうなじまであらわに湯につかる真樹。いつもそうだが、アレの後の風呂は肌がピリピリする感じで心地よい。毛穴が開き切っているせいかもしれない。おだやかな性質の湯は若妻の白肌をほんのりと桃に染め、玉の雫を首筋から肩、二の腕へと滑らせていく。手ぬぐいで頬を撫で、額を拭く。靖夫のザーメンがこびりついた部分にほんの少しムズ痒い感覚が残っているのに、真樹はふっと笑みを浮かべた。
　（張り切っちゃって、うちのご主人様……）
　まだ乳ぶさの腫れがひいておらず、ずっしりと重い感じ。腹の中に逞しい棒の圧迫感覚が残像のようにヒリつき、摩擦に焼けた肉唇は心なしかまた肉厚になった気分である。
　（女ってこうしていやらしい身体になっていくんだわ）
　むろん、それが恥べき変化だとは思わない。最愛の夫との営みの結果なのだから、淫らな変貌とまでいうのは

間違いだろう。心身ともに本物の女に成長しているのである。
　真樹は立ち上がった。湯がどっと浴槽から流れでた。手ぬぐいで股間を、片手で乳ぶさを覆いながら、むっちりと脂がのった丸い女体をかがめて真樹は湯殿へ跨ぎおりた。湯に濡れた下肢をすらりと伸びやかにすると、見事なプロポーションはいっそう引き立つようだ。真樹は上がり湯で肌を打ち、バスルームから出ようとする。
　「？……」
　ところが不思議にもアコーデオンタイプの扉はびくとも開かないのだ。改めて扉の上から下までを見渡したがとくに異常はなかった。もう一度、把手を握って横方向へ力を入れてみる。駄目だ。手ぬぐいを落として両手で掴み、両脚を踏張ってトライしたが結果は同じ。ツルンツルンの茹で卵のような丸い尻がクリクリと動き、足がガニ股になったり内股になったり、裸身が滑稽に変化する。
　苛々する真樹が助けを乞おうと靖夫の名を呼び掛けたときだ。信じられないことが起こった。シャワーの器具が装着されていた壁が突然反転したのである。忍者屋敷の仕掛け扉のようにである。ぽっかりと開いた暗黒の口から冷たい風が流れこんできた。まるでその風に乗るように、一人の男――目出し帽を頭からかぶりすっかり顔を覆っている。服装は猟師が着るような迷彩服――が腰

を屈めて忍びはいってくるではないか。
「――！」
あまりのことに声帯が押さえつけられたように叫びも出ない。乱入者は一人だけではなかった。彼に続き二人目が、いや、続いて三人目も入ってくる。またたく間に目出し帽三人組にバスルームは占領されてしまう。驚愕に裸身の遮蔽も忘れた人妻は暑苦しい服装の大男たちにとり囲まれた。
「い、いやッ！」
そう叫んだつもりだったが、発する寸前に一人の男の軍手をはめたグローブのような手が彼女の口を塞いでいた。へしゃげた唇に目の粗い軍手のケバが押しつけられる。土臭いその臭いが潰された鼻孔にムッと流れこんでくる。真樹の瞳がまだ事態の急変を信じられずに皿のように見開かれた。もう一人の男が彼女の細腕を背中へねじりあげる。
「うう――」
くぐもった苦痛の訴えが軍手に吸収された。自由だった片手を振り回そうとしたが十倍も百倍も強い力があっさりとそれを捉え、背後に一まとめにされた。恐怖が全身にみなぎり、狂ったように藻掻く。股間があらわになるのもかまわず両足をバタつかせ男たちを蹴りあげる。濡れ羽色の陰毛が雫を散らせた。双乳がブルンブルンと弾んだ。男たちは女の必死の抵抗を楽しんでいるよう

だ。誰かの手が黒髪のだんごをわし掴んで振りたくっていた顔を起こし動きを封じる。真樹の恐怖と憤怒の表情が晒される。誰かの手が乳ぶさを掴み、揉みはじめ、また誰かの手が股間に差しこまれた。軍手の不気味な感触に狼狽える。真樹は口の中で幾度も靖夫の名を呼んだが、ウーウーと低い呻き声にしか聴こえない。豊満な人妻の肉をからかっていた淫らな手がさっと引き上げた途端、今度は石のように硬い拳が屈辱に大きく喘いでいる鳩尾に叩きこまれた。

軍手に下半分を覆われた美貌が歪む。眦が吊り上がり、こめかみに青筋が浮き上がった。しかしそれも一瞬の緊張。みるみるうちに顔から血の気が失せていき弛緩した表情になり、白目になる。身体の力が抜け、女体が崩れ落ちる。男たちは軽々と真樹を担ぎあげ仕掛け扉の中に悠然と引き上げていった。壁がもう一度反転して収まると、何事もなかったようなバスルームが出現する。今まで一人の美女が玉の肌を洗っていた痕跡といえば排水口に絡みついている長い数本の頭髪と湯槽に浮かんでいる一本の縮れ毛だけであった。

002　小麦色のお転婆女子大生

美人妻村井真樹が正体不明の男たちに連れ去られた数

時間前に話はさかのぼる。場所の移動は最小限にとどまる。つまり蜘蛛巣村の域内の出来事だ。蜘蛛の糸に引っ掛かって巣の中枢に引きこまれたもう一羽の蝶がいたのであった……。
　鳥居野梨子（トリイ・ノリコ）は埃っぽい砂利道を歩いていた。もう三十分も歩き詰めだ。
　（畜生、あのバスの運転手め。すぐに村に着くだなんて、大嘘じゃないのよ！）
　野梨子は道の石を蹴飛ばしながら途中まで乗ってきた観光バスの助平そうな運転手に毒突いた。運転手は大きなリュックを背負い、健康的に小麦色の肌に日焼けした娘に猥褻な視線を這わせながらいったものである。
　『この道さいけば、すんぐに村さ出っから、そこで宿でも見つければいいべ』
　その人なつこい訛りに騙されて従ったばかりにこのザマだ。もっとも野梨子も大きなことはいえない。観光バスにはヒッチハイクで無理に乗せてもらった。無銭乗車の客に正確な情報まで求めるのは虫が良すぎるだろう。
　（すんぐに、すんぐに、か――）
　野梨子はブー垂れながら額の汗を拭った。大学四年のこの時期は普通ならば就職活動に忙しいのであるが、単位もあらかたとってしまい、卒業後は修士課程に進む予定になっている野梨子にとっては余裕のある時期なのだった。考古学という地味な学問を専攻しているくせに野

梨子の性格は正反対に、勝ち気で跳ねっ返りで行動的で奔放であった。それは彼女の出で立ちからも判断できる。色の褪せたジーンズを太腿の中くらいからばっさり切り落としてショートパンツ風にし裾回りのほつれなど無頓着に放置したまま。白のタンクトップのシャツはこのヒッチハイク旅行に出てからろくに洗濯もしていないので、ずいぶん汚れている。汗に濡れて少し透けたシャツを通して黒ずんだ乳輪がみえるところをみるとノーブラであろう。ブラジャーが必要もないほどのペチャパイではあった。腋毛すら処理してない。顔も手も足も真っ黒に日焼けし、ウエーブのかかった栗色の長髪はブラシを通したのが三日前という乱雑さ。少し化粧するだけで驚くほどの器量となるのに彫りの深いハーフのような顔立ちは汗まみれの素っぴんだ。

　教室でもデスクワークよりもフィールドワークの方が性にあうらしく、専門書をひもとくのは当然としても、それを自分の足で歩き眼でたしかめなければ気のすまないところがある。だから暇を見つけては今回のような小旅行にぶらりと出掛けてしまう。誰にも声をかけないし、誰もが野梨子の放浪癖を知っているので二三週間いなくなっても気に掛けないのが常だった。

　野梨子は歩きながら頭髪へ無造作に指を突っこんでごしごしと掻きあげた。埃にまみれた髪はジャリジャリと音をたてるほどであった。

（ひでぇや、こりゃ。早くシャワーでも浴びなきゃどうしようもない）
前髪を梳きあげて生え際を晒し、胸まで垂れているロングヘアを背後へうるさそうに投げやった。天気は憂欝だったが近くの山から野鳥や蝉の声が流れてくる。こんな時が野梨子にとっていちばん爽快な気分だった。ゴミゴミした都会で生活していると、こういう場所に飛びこみたくてうずうずしてくる。
（根っからの野性児だぜ、エリっぺは）
野梨子は口笛を吹き出した。運転手の意地悪などはもう忘れてしまったようである。
と、背後から車のエンジン音。振り返ると一本道の向こうから砂埃をあげて車がやってくる。小型のトラック。ちょうどいい。あれを止めてこの先どのくらい歩かねばならないのか、訊いてみよう。うまくいけば乗っけてくれるかもしれない。野梨子は親指を立ててサミングした手を頭の上で振りかざした。
トラックには運転席と助手席に三人が窮屈そうに坐り、荷台に五人が鮨詰めの状態で乗っていた。どうみても定員オーバーである。そしてその八人は全員が中年の女たちである事実に野梨子は少なからず驚いた。彼女たちは野良作業の衣服にタオルでほうかむりをしている。色は黒いが野梨子のように健康的ではなく土色に近い。皆、胡散臭そうな視線である。車はしかし、ゆっくりと

停車してくれた。
　事情を話すと村はまだ何キロも先であるらしい。
　「女子の足ではひょっとすっと夕方にかかるかもしんねえな」
　運転席の窓をあけてオバサンがそういった。荷台の上の五人がヒソヒソ声で野梨子を批評しているのが聴こえる。『山猿みてえだ』などといった失礼な言葉も飛びかっている。
　内心苦笑しながらも黙殺して交渉に入る。
　「乗れるんだったら乗ってもかまわんけんども、この人数だらな」
　運転席のオバサンは荷台を指さしていう。
　「大丈夫、私、立ってますから。ほら少し隙間をあけてもらえれば運転席の屋根に腰をかけられるし――」
　ここで見捨てられればまた野宿になるかも知れないので、野梨子も必死である。今日はなんとしても一風呂浴びたかった。
　「だら、仕方ねえから乗れや。しっかり掴まってねえと振り落とされるぞ」
　ようやく許可がおり、野梨子はラッキーラッキーと荷台へ昇りはじめる。
　「こら、そのリュックは邪魔だからこっちで預かっとくど」
　その声に野梨子はそれもそうだと車の中に放りこん

だ。長い足を踏張って軽々と荷台に昇ってはみたもののやはり足の置場もない状態。余所者の飛び入りに荷台のオバサンたちは露骨に迷惑顔ではある。
「御免なさい。お邪魔します」
とやや強引に割って入り、そしてひょいと運転席の天井に昇って胡坐をかいた。少々滑るようだが、横転防止用のロールバーにしがみついていればなんとか大丈夫。
「ここならいいですよね」
明らかに道路交通法違反だが大らかな田舎である。見咎める人もいないだろう。車はのろのろとスタートした。
「皆さん、そっちの村のかたたちですか？」
こういう場合、白けた座を盛り上げるのは新参者の礼儀だろう。しかし彼女たちはそれには答えず、違った質問をしてきた。
「お前さん、幾つかね？」
「はあ、二十一ですが……」
大学の四年生だと野梨子は自己紹介する。すると別のオバサンが、
「あんたもビデオに出てるのけ？」
とわけのわからない質問をしてくる。
「ビデオ？」
不審そうに聞き返す野梨子。
「バカコケ、こんな真っ黒い顔した女子がそったらビ

デオに出られるわけもねえべさ」
　また違う一人がさっきのオバサンの肩をド突き腹を抱えて笑いだした。つられて全員が野梨子と仲間の顔を交互にみながら爆笑の渦となる。おっぱいだって洗濯板みてえのによ、と手を叩いてバカ笑いだ。
　「……」
　一人なんの話やらわからず、ただ自分の容姿についてのあけすけな揶揄であるのははっきりしているが野梨子は怒るのも大人げないと思い、遅れて微笑をひきつらせたりする。
　「まだ男衆に抱かれた経験もなかんべえな。産毛が濃いわ」
　「わたしゃ、おっぱいの先っぽが真っ黒だからてっきりエッチなビデオに出てるもんだとばっかり思ったがなー」
　オバサンたちは野梨子の人格などまったく無視して喋りあっている。どうやら彼女たちは都会の情報をそうとう勘違いしているようだったが、それについては黙って見過ごしてやることにした。しかし『女子大生』の言葉の響きと風俗関係を結びつけて連想するのはいくら保守的で無教養な人々であっても、よくある誤解とまではいえないのではないか。まあ、自分のこの身なりでは仕方のないところかもしれない。それはいいとしても他人の肉体の様子をこれほどズケズケと侮辱するなんて、大ら

かを通り越していると思う。よく、田舎の人間は娯楽が少ないので猥談が日常的に横行しているというが、若者らしい正義感の持ち主の野梨子はそんな見方を都会人の地方蔑視による迷信と思ってきた。これではその信念も撤回せねばならないだろう。同性のくせに女性を家畜並みに品評するのはどういうわけか。

「マナコがギョロギョロしてあいの子みてえな顔つきだべ」

「これが今の流行だわ。おらの若い頃はこんなのはブスもブス、どうしようもねえドブスといわれたもんだ」

「なんか、ソース焼きソバみてえな肌の色づきだんべ」

野梨子が黙っているのをいいことにオバサンたちの会話は増長するばかり。とうとう性器の臭いにまで話は盛り上がっていく。

「風呂に何日も入ってねえ様子だべ」

「んだ。ベチョコも垢さたまってきつく臭いそうづら」

「女子としての行儀がなってねえ。男衆のために毎日肌を磨いてピカピカにしておくのが嫁入り前の娘のすることだ。こいつは跨ぐらどころか、顔も洗ってねえ。まともな阿女っ子でねえのはたしかだ」

「いんや。都会には女の顔と身体した男さいるっていうべ。手術で出来るんだと。ひょっとすっと、こいつは

男かもしれんよ」
　うひゃあ！　カマか！　嬌声とともに荷台は大騒ぎである。
　「ちょっと皆さん！」
　我慢しきれなくなって野梨子は叫んだ。小麦色の美貌がとうとう怒りもあらわであった。
　「あんまり失礼がすぎやしませんか。それはたしかに私は美人ではありません。プロポーションも貧しいものでしょう。しかしですねえ、いくら若輩者で飛び入りの招かれざる客といっても人間としての最低のマナーは守って戴かなくてはなりません。皆さんの私に対するお話は私の人格を著しく落としめるものだと思います。もっと違った楽しい話題に変えようではありませんか。旅は道連れ、束の間の出会いを心地よく過ごそうではありませんか。些細な行き違いで悪戯にこの村の印象を悪くするのは損だと思います」
　怒りを極力押さえながら冷静に言葉を選んだつもりだった。野梨子は言い終えてオバサンたちの顔を見回した。一様に鳩が豆鉄砲でももらったような表情である。不思議なものでもみるように彼女たちは野梨子をしげしげと凝視している。期待していた好意的な反応はまったくなく、不自然な沈黙の時間がジリジリと経過していく。しだいに不安になってきて、野梨子の視線が探るようなものから媚びるような色合に変化する。

「あ、あのぉ……」
　といいかけた時、堰を切ったようにオバサンたちが口走りはじめる。
　「生意気な娘づら！」「女のくせに！」「些細かどうかはこっちが決めることだべ！」「都会の教育は狂ってるっ」「これだから女子に学は必要ねえだ！」……。
　腕を振り回して激怒する彼女たちに野梨子は愕然とする。自分の子供と同じくらいの年下の娘に説教されてヒステリーを起こしたのだ。家夫長制と男尊女卑思想が骨の髄にまでこびりついている。まったく戦前のムードである。田舎の封建性と指摘するにはアナクロすぎて、時間のエアポケットにでも入りこんだかのようだった。
　「わかったわ！」
　野梨子は無線用のアンテナを掴みながら運転席の天井の上に立ち上がった。進行方向からの吹きつける風にロングヘアがたなびき、シャツがそれを孕んで臍を覗かせる。
　「わかりました。お気に召さないようなら、私は下ります。無理をいって乗りこんだのが悪かったのね。余所者はお嫌いなのでしょう。車を止めてください。あなたたちの村には一歩も入りません。来た道を引き返しますっ」
　「まだわけのわからない理屈をいってる。それを決めるのはお前じゃねえんだ！」

「そうだ。まんず目上の者に意見した行儀の悪さを叱らねばならねえ」
「子供は尻さ叩いて懲らしめるのが一番づら」
「ついでにベチョコも掃除してやるべえ」
ムードが険悪になってきた。オバサンたちの眼光が何かにとりつかれたように鈍く淀んだようになった。狂信者のそれだ。今にも天井から野梨子を引きずり降ろしそうな雲行きである。野梨子は初めて恐怖心を抱いた。車はさほどのスピードではなかったが飛び降りるには勇気がいる。それに全財産は運転席のオバサンに預けたきりである。
一人のオバサンがごつい腕を伸ばしてきた。鶏の足でも捕まえるような素早さで、野梨子の細い足首を握り締めた。
「いやっ」
振りほどこうとしたが彼女の力は見かけによらず強い。それに顔を蹴飛ばすような暴力はさすがに気が引ける。野梨子はまだ事態の深刻さをどこか信じられない気持ちでいるのだった。しかしオバサンは奇声を発しながらグイグイと彼女を引きずり降ろそうとする。
「ああ！」
ただでさえおぼつかない足元に悪路の揺れが加わるのである。大きな石に乗り上げ凹にタイヤを落とした激しい振動の拍子に野梨子はバランスを崩し、天井の屋根に

ドスンと尻餅をついた。握っていたアンテナが中途からボキッと鈍い音を立てて折れ曲がる。その隙にもう片方の足も複数の手によって捕まえられた。せーの！　掛け声とともに野梨子の身体は一気に引きずり降ろされた。
「離してっ、離しなさい！」
五人の狂暴なオバサンたちの真ん中に落とされ、野梨子は冷静さを失って藻掻く。オバサンたちの重い身体が折り重なってきた。顔の上にお尻がのっかってきた。手をねじあげられ、お腹を踏みつけられる。足は股裂きのように両側から引っ張られた。やめろぉー、必死の声も土臭い作業ズボンに覆われた巨大な臀部によってほとんど聞き取れない。それどころか息すら満足に出来ないのだ。
「だいぶ、おとなしくなってきたづら」
頭上で勝ち誇った声がしている。当たり前だ。これでは抵抗のしようがない。靴の紐がほどかれていくのがわかった。オバサンたちはいったい何をしようとしているのだろう。
「お前のでけえケツに踏んづけられてたら窒息死しちまうど。旦那にもそうやって毎晩天国にいかせてんのか」
これにはオバサンたちもゲラゲラと大爆笑。巨臀の持ち主は、そだらこといったら恥ずかしいべとようやく腰を浮かしかける。その際、気が弛んだのか、プーッと一

発、ガスを放った。イタチの最後っ屁ならぬオバサンの猛烈な臭気をともなう放屁をまともに顔面に受けて野梨子は涙ぐみながら顔を歪める。
　「いい空気吸ったから生き返っただべ、あーん？」
　再び爆笑。
　「何をする気？　こんな真似をしていいと思ってるの？　早く離しなさいっ」
　気丈にも、尻に敷かれて赫らんでいる顔を振りたくり、野良着姿の暴力行為者たちを見上げ噛みつかんばかりの野梨子である。靴は脱がされ、ソックスも抜き取られた。
　「元気がいいのだけは誉めてやるべ。だが女子はそれだけじゃ失格だ」
　リーダー格のオバサンが野梨子の憤怒の表情を覗きこみ、頬にかかった栗色の髪を指で弾く。
　「みればみるほど生意気な顔さしてるづら」
　やにわに彼女は野梨子の高く整った鼻を人差し指と親指でツンと摘んだ。
　「ンンーッ……」
　眉間にきつく皺を寄せ、黒くて太めの眉を吊り上げる。嘲笑するオバサンたちの一人が無造作な手つきでノースリーブのシャツをめくりあげた。乾葡萄のような乳頭を乗せた胸があらわになった。丸みがあるだけでわずかな隆起程度の貧パイである。

「なにするのよっ」
孔を塞がれた鼻声で陵辱に抗議する。
「胸をみただけじゃ本当の女かもわからねえ」
「男衆ががっかりするわ」
口々に野梨子の胸をコケにする。
「バカにしないでよ！」
野梨子は思い切り首を振ってオバサンの手を払い除けた。鼻頭がほんのりピンク色だ。
「これはれっきとしたレイプだわ。これ以上、続けるなら警察へ行きますよっ」
しかしオバサンたちはニヤニヤ嗤うばかりで耳を貸そうともしない。それどころかショートパンツ化したジーンズのジッパーに指がかかった。
「こんな男が履いてるものを腰につけてるから、気が荒くなるづら。いっそスッポンポンになれば自分が女子であるのを思い出すんでねえか」
「冗、冗談いわないでよ――」
野梨子の表情に初めて怯えの影が滲んできた。これが冗談でもなんでもなく、避けがたい現実であるのを物語るように、四肢を押さえつけてくるオバサンたちの手にいっそうの力がこめられてくるのだった。ジッパーが摘み出され、犠牲者の恐怖を募らせるようにゆっくりと引き下げていく。野梨子の腰が諦め切れずに何度か浮き上がってはよじれる。しかし喉は引きつって声は出てこな

い。冷汗がこめかみからしたたり落ちる。
　ジッパーのさげられたそのすぐ下から水色のパンティがむっくりと顔をだした。オバサンたちの頓狂な声があがる。白やベージュ以外の下着をつけた経験がないのかもしれない。最後まで引き下ろされると、こんもりと薄ら高い女陰を連想させるように、それを覆っているパンティは紡錘形に開いた社会の窓からむっちりと水色のふくらみを露出させたのだった。
　「ここはペチャンコな胸とは違って盛り上がってるど！」
　からかうオバサンの言葉に唇を噛む野梨子。節くれだった二三本の人差し指がその饅頭をつつき、捏ね繰りまわした。
　「変態ッ」
　思わず叫んだ野梨子の頬にビンタが飛んだ。乳首も摘み出されて限界まで引き伸ばされる。
　「ああ、もうイヤッ」
　渾身の力でもって抗おうするがびくともしない。しかし先程はオバサンたちに手を貸した車の揺れが今度は哀れな女子大生に味方した。大きく弾んだ車体。その拍子にオバサンたちも飛び上がり、拘束の手がふっと弛んだ。野梨子はここをせんとと四肢を引き抜き、驚いて捕まえようとする正面の一人を蹴飛ばした。敏捷性なら若さに分がある。バネ仕掛けのように上体を起こし、背後

の何人かに肘鉄を食らわした。仰けぞるオバサンの身体を踏みつけて立ち上がり、荷台の縁に手をかけてそのまま飛び降りようとする。一瞬早く、オバサンの伸ばした手が野梨子の豊かな長髪をわし掴んだ。

「痛ッ――」

もう下半身が外に飛び出している。膝を伸ばせば疾駆する砂利道に届くのだ。両手で縁に掴まり身体を辛うじて支えてはいたが、彼女は頭髪で宙吊りに近い状態になってしまった。

「痛ててっ、離せ、こら！」

頭皮が猛烈に痛い。他のオバサンも加勢して彼女を引き上げようとした時、車が徐々にスピードを下げやがて停止した。荷台の騒ぎに気がついたのよりも前方からサイレンを鳴らして一台のワゴン車が近づいてきたのだ。

車体の横腹には『蜘蛛巣村防衛団巡回車』と書かれてあった。

車が止まって野梨子は地に足をつけ踏張れたが、頭髪は掴まれたまま。さらに両腕も左右から捕まえられ、逃走を封じられている。

防衛団巡回車から下りてきたのは三人の男たちであった。一人が年配であとの二人は青年――といっても三十代半ば――である。揃って『村の消防団』風のユニホームできっちり決めている。背中に丸で囲まれた白抜きの『防』の文字が何とも滑稽であり、また不気味でもあ

る。彼らはゆっくりとこちらに近づいてきた。彼らの出現にオバサンたちは困惑気味の緊張を隠さない。いけない悪戯を親に見咎められた子供のような表情だ。いつもの野梨子ならこの新たな登場人物たちが果たして自分の味方なのかそうではないのか、注意深く考察するところであるが――彼らの誇示している胡散臭い立場を考えれば奔放なヒッチハイク女子大生にとっては鬼門でこそあれ力になるとは思われない――オバサンたちの常軌を逸した乱暴狼藉に昂奮しきった彼女が第三者イコール救世主と早とちりの結論をだしてもやむをえまい。

「助けてっ、早く！」

野梨子は足をバタつかせ、ジーンズのショートパンツに包まれた健康的な腰をクリクリと振った。

「駄目だな。公道で騒ぎを起こしちゃ」

いちばん年配の男が野梨子の悲鳴を無視してオバサンたちにいった。生え際が大きく後退し薄い頭髪には白髪が混じっている。鼻の下にチョビ髭を生やし、丸眼鏡をかけいた。彼がリーダー格なのはすぐにわかる。年長だし、他の二人が持っていない竹刀に似た警棒を手にしている。自分の手のひらをそれで打ちながら野梨子の背後までやってくると今度はそれを杖代わりに地面についた。

「早く助けてください。ひどいのよ、この人たち！」

意に反して救援者たちの行動がひどくスローモーなの

で野梨子の声は上擦っている。必死の抗議にも何の反応も返ってこないのだった。駄目だな、騒ぎを起こしちゃ、ともう一度彼はいった。無視してはいるものの、彼の視線は女子大生のピチピチした太腿と腰、それにまくれたタンクトップから見え隠れする小麦色の背中を行き来していた。

「この娘が癇癪おこして暴れるんだわ、村長さん——」

オバサンの一人がようやく言い訳めいた表情で弁明を行なった。

（村長……）

野梨子はその言葉の響きと意味を繋ぎあわせるのにしばらくかかった。しかしそれが本当ならばもう心配はいらない。行政の首長ならば法の施政者であるはずだ。この人権侵害を目のあたりにして放っておくわけにいかないだろう。いくらわが国が人権意識の後進国だって現行犯なら文句はないはずである。安心感が全身に漲ると髪を邪険にわし掴まれたままの状況に対する激しい憤りも同時に沸いてきた。それは彼女の身体に力を与え、一気にオバサンたちの手を振りほどかせた。

「いい加減にしてよっ。まったく！」

カバッと上体を起こしふりかえる。顔の正面に乱れかかった髪を無造作に掻きあげた。大柄な女のダイナミックな動きに三人の男たちは圧倒されたように一歩引き下

がった。野梨子も村長と呼ばれる男が防衛団のはっぴを着ている姿を初めて目にしてとまどいを覚える。しかしまずは自分がどんな目にあったか、告発するほうが先だ。抗議の言葉を発しようとする前に村長の大声が飛んだ。
「動くんじゃない！」
それが自分に向って発せられたものであるのに野梨子はしばらく気づかなかった。
「何人も防衛団団長の指示があるまで軽挙妄動は慎んで戴こうっ」
村長であり防衛団の団長でもあるらしい男は竹刀をドンと突いて頭ひとつ大きな野梨子を睨みつける。自分より背の大きな女と話すオトコは概して必要以上に威厳をあらわにするものだが、彼の場合も例外ではないようだった。
「で、どうしたんだって？　婦人会の皆さん？」
村長は野梨子の肩越しにオバサンたちに尋ねた。
「まんず自動車のあのアンテナを折ったんはこの娘っこだ」
一人が申告すると全員が頷く。
「ヒデさんと松さんの顔を殴り――」
ヒデさんと松さんが顔をだした。二人とも腫れた顔をし、一人などは鼻血も垂れている。
「イネさんと私は胸を踏んづけられて骨が折れたみた

いだべ」
　イネさんと『私』は急に胸を手で押さえてゴホゴホとわざとらしく咳きこんだりする。
　「嘘、嘘ですよ。そんなにひどいわけがないですよ」
　野梨子は慌てて村長に手を振り、オバサンたちに声を荒らげた。
　「大袈裟なことをいわないでください。あなたたちがあんまり……」
　「黙らっしゃい！」
　続けようとする野梨子を村長の一喝が制した。
　「正当な証言に圧力をかけてはいかん。これ以上威圧的な態度をとるとその口を封じることになるぞ」
　「正当な証言じゃないから抗議をしてるんですっ」
　顔を真っ赤にする野梨子。まだ村長の中立性を疑っていない。
　「正当な証言かどうかは公平な第三者である私が決める問題だ。当事者の主張をいちいち認めていたら収拾がつかないだろうが。物事には順番がある。あなたの意見はのちほど伺おうといっておる」
　「……」
　まっとうな論ではある。野梨子は渋々様子をみる判断をした。村長は野梨子をどうして車に乗せたのかと訊いた。オバサンたちは車を強引に止められ無理矢理乗りこんできたと証言。

「カニ族か。ヒッピーだべ」
　と初めて傍らの若い男が呟いた。今や死語と化しつつあるその言葉に非難めいた保守的な大人の色が滲んでいて野梨子はイライラとする。
　「横井君――」
　村長はその男にゆっくり諭すようにいった。
　「我々は立場上、そういう予断に基づいた考察は注意深く避けねばならないのだよ。君も防衛団に入ってもう二年になるのだからそろそろわかってきてもいい頃じゃないかね」
　横井君はハッと帽子のひさしに手をやり腰を四十五度に曲げて恐縮する。
　「――さてこの娘が車に乗ってきたわけだな。しかし突然、暴れだすのも妙じゃないか。みたところ精神病質があるわけでもなさそうだし。もっともこれは正式な精神鑑定をしてみるまでははっきりした結論はいえないわけだが」
　精神病うんぬんは気になるが、ようやく話が核心に迫ってきたので野梨子はほっとする。冷静に筋を追っていけばいやでもこの話の理不尽さが明確になっていくだろう。
　「だから私たちも訳がわからないだんべ。東京の女子大生の話をうちらでやっていたら急に怒りだして天井から飛びかかってきただ」

「女子大生？……」
村長の眼が鈍く光った。
「あんた大学生なのか？」
「ええ、そうでうよ。だけど今の彼女の話は違っていますから。天井から飛びかかったのではなく、天井から引きずり落とされたんです！」
野梨子の剣幕をすかすように横井君が口を挟んだ。
「天井さ乗っていたんは認めるだか？」
「ン？　それはその……」
虚を突かれたように野梨子は口篭もる。立派な道交法違反でねえかと横井君は嬉しそうにもう一人の青年と顔を見合わせる。
「そんな微罪よりもだ。大学生が夏休みでもないこの時期に山村をうろついているっていう不審な行動の方に私は注目するんだよ」
村長はいわく有りげにいうのである。
「それは……」
といったきり野梨子はいい淀んでしまう。学問についての申し開きはいくらでもできようが、突発的な行動をどう説明すればいいのか途方にくれるばかり。自分でも理解できていない衝動をこの頭の堅そうな田舎者に理解できる訳もなさそうである。
「皆さんもご存じのように」
と村長は野梨子を除くその場のすべてに向って一席ブ

チはじめた。
　「我々が愛してやまないこの蜘蛛巣村の象徴的存在である神聖な蜘蛛山に、暴力派学生集団が隠密裡に潜入し大量の兵器とともに武闘訓練を企てせしものとしたのは、つい今から八年の前の出来事でありました。彼らの言い草によれば警戒厳重な首都東京を離れ、ここを適地と選んだ理由のひとつとしてあげたのは、蜘蛛巣村には警察権力が存在していないがためでした。蜘蛛巣村には警察がないっ、卑怯にも彼らはそういったのです！」
　村長はそこをさも口惜しそうに強調する。
　「たしかに蜘蛛巣村の地理的地政学的不利は産業の停滞と人口の減少をもたらし、もって行政サービスの一方的な打切りを促したのでありますが司法権すら例外ではありませんでした。戦後二十年間つづいた駐在の制度は廃止され、隣村に吸収されて一月に一度の巡回を待つのみでありました。冬期間ともなればこれも途絶し蜘蛛巣村は、我が村は司法上完全に陸の孤島と化すのであります……」
　村長はそこでいったん話を区切り、懐からハンカチを取り出して目頭を押さえた。そして丁寧に畳んでしまうと前よりも力をこめて続けるのである。
　「そうした悲劇的な歴史をもつ無力な一寒村に彼らはつけ入ってきたのだ。卑劣な、これほど卑劣なことがあろうか。もう少し公安当局の発見が遅かったなら完全武

装化した彼らと機動隊との全面対決は避けがたく、この蜘蛛巣村は戦場の村となって焦土と化す恐れもあったのである！　彼はいった、蜘蛛巣村には警察がない！　蜘蛛巣村には駐在もいない！　その厳然たる事実が青二才どもの破壊分子の侵入を許し、村始まって以来の厄難をもたらしたのだ。屈辱、汚辱、恥辱、どんな言葉をもってしても的確でない敗北感と無力感から、しかし我が蜘蛛巣村村民が立ち直るのにそう長くかからなかったところに私は無性の誇りを感じないわけにはいかない。そう、我々は立ち直り、誓った。誰も守ってくれないならば、自分たちで自分を守ろう。自前の警察をもてばいい。意気は高く、結束は堅かった。自警団が組織され、長年にわたる実績が蓄積され、ついに管轄省庁の同意を取りつけて地域防衛団に昇格、準司法権の分与が承認されたのだ！」

　村長がいいきるとまばらな拍手がオバサンたちの間から沸き起こった。それに手を振ってこたえながら村長はいった。

　「だからこそこの村民の希望と努力の結晶である防衛団は何も痴話喧嘩の仲裁のみに用いられるものではないのです。村外からの脅威と圧力を未然に防ぐため、その萌芽を調査し探索して摘発することこそ本来の業務なのであります。今その萌芽が我々の目前に出現した。彼女は放浪という曖昧模糊とした理由で蜘蛛巣村に潜入し、

当村所有の車両に積載過多を指摘されたのにもかかわらず許可なく乗車。それを糾弾されると突如暴徒化し、無線装置を小破せしめ、さらにこれを止めに入った善良な市民を暴力でもって撃退し、反省の色すら微塵もなく加えてその罪を前述の善良な市民数名にかぶせて逃走を企てようとしている。その過激な行動と挙動の不審は破壊分子集団の先兵とも、あるいは本来の活動から我々の眼を誤魔化すための陽動作戦とも推察され、よってここに身柄を正義の名において拘束し、地域防衛団の管理下に置くと、告知するものであります」
　村長は重々しくそう宣言すると背後の二人に、
　「横井君、青木君、容疑者の身柄を確保しなさい」
　と指示した。二人は眦を吊り上げて野梨子に迫ってきた。思いもかけない事態の急展開に野梨子は口元を引きつらせて笑みさえ浮かべる困惑ぶり。
　「それって、どういうことよ……」
　声が擦れているのに気づく余裕もない。

003　連行

　「コラ、動くんでねえっ」
　二人は野梨子の剥き出しの二の腕を左右からがっしりと捕まえた。彼らも野梨子より頭半分程度ひくい身長だ

ったので両側からこの野性的な美貌を見上げる形となる。南国の熱砂を思わせるような肌の匂い。指を食いこませた上腕部の弾力ときたらどうだろう。襟刳りの深い胸もとから乳首でもみえないものかと視線を這わせる。ノーブラであるのは明らかなのだ。

「うン？」

青木が小さな驚きを顔に表した。腋の下に差しこんだ手にサリサリと触れるものがあった。それが未処理の体毛であるのに気づくと彼は頓狂な声をあげた。

「こいつ、腋毛生やしてんぞ」

そして無造作に野梨子の腕を大きくあげさせて腋窩に鼻先を突っこむようにして覗いた。この田舎者は若い女の腋毛を眼にするのが生まれて初めてであったらしい。たしかに鼠蹊部を思わせるような肉の色をしたそこには黒い短毛が縦長に翳りをつくり汗に濡れている。

「何するのよ！」

破廉恥な男の行為に野梨子はカッとなって叫んだ。手を振りほどき腋をしめる。その拍子に肘が青木の獅子鼻にガツンとぶつかった。

「痛ぇぇ」

青木は鼻を押さえたがオバサンたちの失笑を買う羽目になった。

「これこれ、つまらない真似はやめるんだ。身体検査は向こうへ行ってからするんだから」

　村長は青木をたしなめる。畜生、女子め、と口の中で罵りながら青木は忌ま忌ましそうに野梨子の腕を掴み直したが恥を掻かされた腹いせに指にこめる力はさっきの倍となる。野梨子は唇を噛みながら青木を睨みつけた。こめかみに青筋がヒクヒクと浮き上がっている。顔にも胸もとにもぶつぶつと生汗が光っていた。
　「婦人会の皆さんにはあとでお話の続きをお伺いすると思いますが、いつまでも公道を占拠しておるわけにはいかず、とりあえず村へ戻ってください。このたびは不審者の発見、拘束に協力して戴き、まことに有難うございました。村の安全と平和に多大な功績のあった事実を村民になりかわり厚く御礼申し上げます」
　村長は慇懃にそう述べると一礼して彼女たちの小型トラックを見送った。
　「ちょっと待ってくださいっ」
　野梨子は悲鳴に近い声をあげる。
　「私のリュック、置いていって！」
　しかし婦人会のトラックは粉っぽい土煙をあげて遠ざかっていく。野梨子の全財産の入ったリュックサックとともに。
　「どういうことです。私だけ捕まえてオバサンたちは帰しちゃうんですか？　おかしいじゃないですか、私は何もやっていないんですよ。うっ、痛いわね！　そんなに力を入れなくたっていいでしょうっ」

　二人の男に厳しく腕を掴まれて引きずられていきそうになるのを両足を踏張って抵抗しながら野梨子は村長に抗議した。
　「それにオバサンたちは私の所有物を持っていってしまったわ。すぐに呼び戻してくださいっ」
　村長はゆっくりと女子大生へ振り返った。三人は押し合いへしあいしながらしだいにワゴン車へ向ってはいるものの、大女を小男二人が扱いかねているといった様子である。村長は憲兵隊の隊長よろしく竹棒を玩びながら野梨子に近づいていく。
　「――今度は善良な市民を泥棒呼ばわりする気か。いい加減にせんと痛いめにあわせるぞ。アーン？」
　村長は先程までの態度とはうってかわって狂暴な気配を漂わせていた。竹刀の先を野梨子の鼻先に突き出し、今にもつつきそうなくらいである。
　「……こ、これはあまりにも不当だし不公平だわっ。何度もいうようですけど、私は何もやっていないんですよ！」
　「黙れ！　ゲバルト学生の女スパイめ。何もやっていないだと？　何かやってからでは遅いだろうが！　え？　未然に不穏な計画を暴き、悪事を予防するのが我々、防衛団の使命なのだ。貴様のような奴は叩けばいくらでも埃がでるに決まっとる。あらいざらい喋ってもらうぞ！　さあ、なにを愚図愚図しているんだっ。小娘一人を御せ

んでどうする、横井に青木っ。とっととしょっぴけ！」
　竹刀をビュンビュン振り回し、村長は狂気に似た昂奮ぶりでハッパをかける。
　とうとう車に連れこまれると野梨子は後の座席の村長と横井の間に座らされた。両脇をとられたままである。青木が運転席に座り、エンジンをかけた。
　野梨子は頭に血が昇ってカッカしている自分を、懸命に落ち着かせようと試みる。状況を冷静に分析し、今、自分がどうなっているのか、どういう行動をとるのがベストなのかを考えるのだ。しかし考えれば考えるほどあまりに馬鹿馬鹿しい事態の展開が浮き彫りになるばかりである。はっきりしている点をあげてみよう。まず自分、鳥居野梨子はこんな目に遇わなければならない罪を犯していない事実。アンテナを折ったのはたしかに自分だが厳密に法律的分析を行なうならば、あれは緊急避難的行為による結果であって犯罪に該当するものではない。もし非難されるべき点があるとするなら定員オーバーの車に無理矢理に乗ったことだが、あのトラックはそもそも定員オーバーであったのだし罰則が加えられるのは車両責任者である運転者であるはずである。百歩譲って野梨子が悪いと認めてもこれはほとんどの場合、その場での説諭で済むケースであろう。逮捕、連行などとはまったくもって過剰異常な措置といわなければならない。しかしそれが現実に強行されている……。

　次に指摘しておきたい事実は――ここが最も肝心なポイントだと思われるが――自分を拘束している者たちの身分が本物の警察ではない点である。野梨子にとって幸いなのは彼らが警察を律している法体系からいくぶん自由であり、融通がきくであろうとの予想である。この場合、逮捕拘束が何かの間違いだと判明した暁にはすみやかな解放が期待できるわけだ。しかし一方、警察にブレーキをかけている法体系からの逸脱は被疑者に対する扱いを乱暴ならしめる根拠となりかねないとすれば、これは両刃の剣となりうる危険な事実でもある。
　以上の事柄を考えあわせると、この地域においてまったくの異邦人であるハイカー女子大生がただ一人で抗するには手に余る事態であるのは明確であろう。味方が必要である、と野梨子は車内で左右に身体を揺らしながら結論をつけた。ただ、その味方がどんな種類の人間で、いったいどうやって連絡を取りつければいいのか。たぶん弁護士が最も適切な味方になってくれるだろうと野梨子は思ったが、さて弁護士の選任を要求して話が通る相手かどうか……。

　この章の残りは有料本編でお読みください。
######

004　一村一品は極上の肉

　レストハウスの浴室で突如闖入してきた暴漢たちに拉致された村井真樹は薄暗い一室で意識を取り戻した。裸電球に照らされたその部屋はひどく殺風景で倉庫のたぐいを連想させた。しかし彼女が辺りの様子に気取られていたのも一瞬であった。すぐに自分の肉体に起こっている異常について苦痛とともに思い知らされたのだ。
　「……」
　口に何かを詰めこまれ、鼻まで覆うタオルで猿轡をされている。
　身体は全裸のままであったが、その裸体を窮屈に拘束されている。荷造り用のロープと思われる縄でまず後手にきっちり縛られている。真樹の匂うような人妻の白肌にそれは食いこみ、手首を交差させて高手に繋ぎ、前に回して豊満な双つの乳ぶさの上下に二重三重と巻きつけれられている。手首の感覚がなくなるほど痺れきり、呼吸も苦しいのはこのためだったが、もっと異様なのは下半身だった。長いすらりとした両肢は胡坐に組まされ、手首と同じように足首もまた緊縛されていた。その縄尻を長く伸ばして乳ぶさを挟んでいる胸縄に通し、首を一巻きしてもう一度足首に戻っている。真樹がこれが胡坐縛りなる拘束の仕方であるのを知るのはあとになるのだ

が、その時は屈服するように丸められた背中と折り畳まれた股関節がジーンと怠く、砂袋でも背負わされているような首の疲労と肩の凝りに脂汗を額に滲ませるのが精一杯。わずかに自由に動く、細首を前後左右に振り、足首から先をモゾモゾと蠢かせてみたが、自分の取らされている姿勢の卑劣さを確認するだけであった。
　いったい自分がなぜこんな不様な格好にされているのか――真樹の頭に『誘拐』の二文字が浮かび上がってきた。ぞっとして心臓が縮み上がり、全身の産毛がささくれだつ。それも単純な欲情を満足させるために衝動的に行なわれたものでないのはたしかである。尋常でない連れ去られ方をみればはっきりしている。浴室全体を大がかりに工事しなければ出きっこないのだから組織的で計画的な犯行であろう。
　でもなぜ……。営利誘拐ではあるまい。根拠はないのだが直観的にそう思う。人身売買のための人さらい、かどわかし、そんな言葉が脳裏を横切った。行方不明になる海外旅行の邦人や留学生を雑誌で目にするがそれに似たものではないか。真樹は絶望的にがぶりを振った。入浴のために結んでいた団子はいつしかほどかれて濡れ羽色の黒髪が頬を掠めた。
　「うう……」
　夫の顔がオーバーラップしてくる。
　（あなた、早く助けにきて、いまならきっとまだ間に

合う――)
　激しく情交をかわした妻が入浴している途中で忽然と姿を消してしまって途方に暮れている彼の姿が容易に想像できた。真樹の胸に熱いものがこみあげてきて、ふいにこの狼藉に対する激しい怒りが沸いてきた。真樹は敢然と藻掻きはじめた。なんとしてもこの忌まわしい戒めを振りほどき、夫の元へ帰るのだ。彼の腕に抱かれ、変わらぬ愛を誓いあうのだ。しかし縄は巧妙に淫辣に肌に食いこんでいる。まるで蜘蛛の糸のようである。藻掻けば藻掻くほど絡みつき、柔らかい肉を締めつけてくる。彼女の白い身体が苦渋の汗で鈍く輝き、頬や胸もとや太腿のつけ根辺りがほんのりと赫らんだ。縄は抵抗の力ばかりか気力までも女体から吸収してしまう作用が備わっているようである。背中の十本の指が助けを求めるように開かれ、そして手のひらに爪が食いこむほど硬く握り締められる。
　真樹はがっくりとうなだれた。とても無理だ。自分の力でほどけるものではない。頭髪に隠れた彼女の瞳から一筋の涙がこぼれ落ちた。これっきり私は太陽の光もあたらぬ暗黒の底に連れ去られ、一生、夫には再会できず、もう二度とあの幸せの日々には帰れないのだろうか。信じられない。許されるはずはない。今にも警察が踏みこんできて救出され、あっさり悪夢から解放されるに違いない。そう、これはきっと夢なのだ。それ以外は

考えれられない。考えたくはない――。
　この倉庫とおぼしき一室の扉に鍵が差しこまれる音がした。真樹は顔を上げ全身を緊張させた。ドアの向こうにいる人間が味方であることを願いながら。
　「奥さん、気がついたかい？」
　入ってきたのはトレーニングウェア姿のむくつけき大男三人組。目出し帽も迷彩服もなかったが彼らがバスルームに押し入ってきた男たちであるのはすぐにわかった。真樹の頭は恐怖でカァーッと熱くなり、同時に奇天烈な縛りにされている裸身を晒す羞恥に顔をから火が出た。
　三人はニヤニヤしながら真樹のまわりを取り囲み、腰を屈める。剥き出しの肌に刺さってくる男たちの視線に、睨みつけてやろうといった勝ち気な心も萎みがちで真樹は顔を背けるように伏せてしまう。
　「けっこうきついだろ。この縛り方」
　胡坐縛りっていうんだぜと三人の中ではいちばん年長らしい正面の男がいった。
　「ＳＭの初心者に、ＳＭの心を手っ取りばやく教えるには都合のいい縛り方だな」
　ＳＭ？　ビクリとし真樹はやや青ざめた顔を上げて男をみた。
　「おうおう、おっかない顔しやがって。可愛い顔に似ず、性格はきついんだな、奥さん。胡坐縛りにされても

そんな噛みつきそうな表情の出来る女はそうはいないぜ」
　男はそういいながら視線を縄に強引に絞りだされてぷっくりふくれている美乳へ這わせてくる。真樹はそれを知ると背筋がざわつき、全身に鳥肌が立った。やっと振り上げた顔も再び伏せなければならなかった。

この章の残りは有料本編でお読みください。

005　村営キャバレーで働きなさい

　真樹は反論しようにも猿轡に押さえられてあたらくぐもった呻きをこぼすしかないのだ。見兼ねた野梨子は吉岡に勇敢にも抗議する。
　「こんなのあんまりだわ。あなたたちがこれを正当な取り調べだというなら彼女の主張もちゃんと聞くべきでしょう。すぐに猿轡を取って縄をほどいて上げなさいっ」
　真樹をねっとりと睨みつけていた吉岡の陰険な視線が女子大生の浅黒い顔に向けられた。
　「鳥居野梨子。私は女ゲリラのお前に寛大にも忠告を

したはずだぞ。余計な発言で取り調べの進行を妨げるようだと残念ながらお前にも猿轡を噛ませるとな」
　吉岡は横井にあごでしゃくった。横井はヤレヤレといった表情で青木を促し立ち上がった。マサオも続き、三人は野梨子を取り囲む。
　「さて、何さ咥えこむ？　隣の人妻のようにすっか、それともレモンのボールのギャグにすっか――」
　横井が野梨子の頭髪を弄びながらいった。
　「こいつの口はちょっとやそっとじゃ塞げそうにありませんからね。ひとつ強烈なやつをかましてやりましょうや」
　とマサオは自分の靴下を脱ぎはじめた。風呂もろくに入っていないのか、粉っぽい足がくさい臭いをさせて出てきた。横井も青木も鼻を摘むほどだ。
　「なーるほど、そいつさ押しこめばぐうの音もでねだろ」
　横井はいい、自分は鼠色の雑巾をどこからか、もってきた。
　「さ、口さ開けな――」
　「いやっ、そんなもの冗談じゃないわ！」
　しかし両手を後に縛られた身で三人の男の力にかなうはずもない。三四本の手が野梨子の顔をまるで百面相でも楽しむように掴み回し、口をこじ開けさせるとマサオの靴下が強引に押しこまれた。

「グェッ――」
　目を白黒させて汚物を呑みこまされる野梨子。その上から雑巾を広げてがっちりと結びつける。異臭のせいだろう、野梨子は涙をボロボロとこぼしながら顔を盛んに振っている。
　「どうだ、俺様の靴下の味は。さぞやおいしかろうなあ」
　マサオは彼女のあごに手をかけて上向かせ、カリカリした表情の女子大生を痛快そうに眺めるのである。
　「鳥居野梨子二十一歳、女子大生。お前の罪は隣の淫売よりもはるかに危険で重大だ」
　吟味の矛先は野梨子へ向けられた。彼女もようするに真樹と同じで挙動不審の危険人物という曖昧な容疑をかけられているのであるが、婦人団が乗っていたトラックのアンテナを破壊した事実があるのでやりやすい。彼らは野梨子を蜘蛛巣村の山中で武装訓練をせんと企んでいる暴力派学生集団の斥候と断定するのだった。
　「どうしようもなく癇癪持ちのその荒い気性、自分勝手な論理展開、大衆を軽蔑する不埒な心根、どれもがお前を危険思想の持ち主と示している。これ以上、この村に徘徊させておけば蜘蛛巣村の平安ばかりか、わが国の秩序にも重大な危機をもたらすものと断ぜざるをえない」
　蛇のような表情のない吉岡の眼と充血して憎悪を滲ま

せている野梨子の瞳とがぶつかりあった。吉岡の視線はふとそらされ、縄を受けている彼女の平板な胸乳に注がれた。野梨子は多少鼻白み額に苦悩の皺を刻んだが、それもすぐに消え、再び攻撃的な、眦を吊り上げた表情となる。
　「村井真樹と違い、この女子大生が道を踏み誤ったのはその貧相な肉体へのコンプレックスからだと思われる」
　と吉岡はしたり顔していうのだった。
　「およそ男性との愛情とは無縁な容姿の持ち主が自分を受け入れてくれない世間に対する憎悪を日々つのらせていくのは有りがちな成り行きだ。健全な精神は健全な肉体に宿るの逆説的証明として、この娘の不幸はあげられるであろう。しかし、世間のブスがすべて危険思想に走るのでないのを考えれば、同情こそすれ、認めるわけにはいかない罪状であるのもまたたしかなのである」
　だからこそ身柄の確保は正当な行為であると吉岡は強調する。
　真樹はこの男の様子になぜ自分が狂気を感じないのか不思議でならなかった。言動や行動を考えれば常軌を逸しているのは明らかなのに、彼の自信に満ちた態度と語り口を目のあたりにすると自然に頭に入ってきてしまう。なんとなく説得力があるような気がして、このまま行けば本当に自分が罪を犯したのではと錯覚しかねない

雰囲気をもっている。別にそれは異様な感情ではないかもしれないとも思う。ヒトラーを信じたのは一人や二人ではない。何百万人ものドイツ人が洗脳されたのだ。暴力と恐慌を巧みに操れば狂気を狂気と思わせないのはあんがい簡単なのかもしれない。この状況ではあっさり罪人にでっちあげられるのは避けられそうにもないが、自らそれを認めて白旗をかかげるのだけは拒否しなければならないと思う。それこそが狂気と一線を画す方策であり、きっとこの地獄から逃げだす原動力ともなるはずなのだ。

「さて、お前たち二人にはふたつのコースが選択できることになっている。ひとつはこの調書を認めず――」

吉岡がいう調書とは露出度の多い服装で村を歩いたとか、大声をだしてセックスをしたとか、生意気な口をきいたとか、胸が小さいのでゲリラになったとか、彼があげつらった嘘八百の理屈らしい。

「正式な裁判を争う。その場合はこのまま蜘蛛巣村の地下簡易収容所で半年に一度巡回してくる移動裁判所を待ち、もし有罪判決を受ければ蜘蛛巣村地下簡易収容所が簡易刑務所としてお前たちの身柄を刑期満了まで預かることになる。満了後、お前たちは前科者として社会へ戻るわけだ――これはまったく法律に則って杓子定規におこなうコースといえる。しかしこれでは時間もかかるし、経費も人的資源も無駄にする結果にはなる。そこで

蜘蛛巣村ではとくにボランティア条例を定めて弾力的にこれを運用している。つまりもうひとつの選択肢だ。まずお前たちがこの調書を認め、すべての罪を悔い改める旨の宣誓をし、正式の裁判を望まず、次に蜘蛛巣村の臨時職員として一定期間の労役に従事するならば、蜘蛛巣村はお前たちの告訴を取り下げ、争わない旨を約束するわけだ。もちろん前科がつくようなことはない。寝起きもこんな地下ではなくまともな家屋が割り当てられる。お前たちの気のもちようで精神修養、あるいは女としてのたしなみさえ身につけられ、社会復帰の一助となる可能性すら十分にあるのである。なお、これはヨーロッパの各国が徴兵を忌避した者に対し、刑務所に入れる代わりに社会奉仕に従事させる方法にヒントを得た、正当で進歩的な施策である点を強調しておく」

　吉岡は自分の演説が殊の外うまく行ったのに満足してセブンスターに火をつけた。

　「団長に代わって少し統計をいわせてもらえばだ」

　太田がノートをめくっていった。

　「わが国における裁判での有罪率は９９．９８％。過去にこのボランティア条例を選択した件数は十八件、正式裁判を選んだ件数は０件。つまり１００％の人間がボランティアとしてこの蜘蛛巣村に何らかの奉仕をして社会へ戻っていったのだ。お前たちもその事実をよく噛みしめて我を張らず、我々に余計な手間をかけさせないで

速やかに皆にとって妥当な選択をするように。わかったな」
　小汚い畳の上に並んで坐らされている真樹も野梨子も猿轡の中で開いた口が塞がらないといった表情である。これは恫喝であると二人は思った。今日のいま、初めてあった二人だが、十年来の親友のように顔を見合わせ途方にくれた視線を送りあうのだった。とても許せる話ではない。二人ともまったく強引にでっちあげられた冤罪なのだ。それなのにこんなひどい目に逢わせられ、そのうえ罪を認めなければ日も当たらぬこんなところに幽閉するというのである。気の強い彼女たちでなくてもすぐには承服できない内容であろう。
　本人の意思を聞くらしく、まず真樹の猿轡が取り外された。
　「村井真樹、三十二歳、主婦。この調書を認めるな？」
　吉岡の問いに真樹は激しく首を横に振った。
　「バカいわないでよ。誰がそんなものを認めるものですか！」

　この章の残りは有料本編でお読みください。

006　熱い肌は鞭のカンバス

　野梨子は唇を噛み締め、じっと石垣の顔を睨みつけたが、へらず口はでてこない。栗色のロングヘアが彼女の冷え冷えとした表情に垂れかかりいっそうの硬質美をかもしだしている。
　「今日は初日、来たばかりだから見逃してやる、といいたいところだが、何事も最初が肝心だ。ここでのお前たちの立場がどういうもので、管理者と収容者の厳しい関係がどういうものか、バッチリと教えてやる――」
　石垣はマサオと太田に目で合図する。胡坐縛りの懲らしめをさっきまで施されていた真樹は鞭打ちを免除され、野梨子だけが二人に組みつかれた。
　「いやよっ。赦されないわっ。私たちは奴隷じゃないのよ。容疑者なのよ。犯罪者ですらないじゃない！」
　後手縛りを外された隙に両手を狂ったように振り回し、マサオの顔を掻き毟り、太田の頭髪を掴んで激しく抵抗する野梨子。とっくに股間の前貼りは剥がれ落ち、眼に染みるような黒々とした陰毛が露出していたが、猛烈に暴れる下半身につられるようにささくれだってお転婆娘にはぴったりの様相である。
　「やめてっ。もうやめなさい」
　真樹も見るに耐えず叫んだが、お前はこっちで見てい

ろと石垣に畳の間の脇へズルズルと引きずられていき、縄尻を棚の支柱のようなところに括りつけられてしまう。
　「おとなしくしやがれ、淫売！」
　マサオと太田は二十二歳の大柄な女子大生の抵抗を扱いかねて汗だくになっていたが、ようやく馬乗りになって上半身の封じこめに成功する。ハァハァと荒い息に咽ぶ野梨子の裸身。自分の汗で濡れ、暴力者たちのこぼす汗を弾いている。
　「世話を焼かせやがって、こいつ！　たっぷりとヤキを入れてやる。吠え面掻くな」
　と太田は女子大生の浅黒の頬を平手打ちし、両手首を掴んで強引に頭のあへ引きあげた。ざんばらに乱れた髪に覆われた彼女の顔、だがキリキリと噛みしめられた白い歯は印象的に剥きだされている。太田はすぐさまその手首を交差させ、まだ後手縛りの痕も生々しいそこへ再び縄を巻きつけていく。マサオはどさくさに紛れて野梨子の胸に両手をあてがってまさぐったりしている。
　「ど、どこ触ってるのよっ。いやらしいわね！」
　野梨子は不快な感触に身体を揺すり、頭を起こしてマサオにまくしたてる。できるなら噛みついていただろう、すごい剣幕だ。
　「ふん、どこだと？　それはこっちが聞きたいぜ。洗濯板みたいな胸しやがって、お前は女じゃないぞ、クロ

スケ！」
　野梨子に負けじと大声で怒鳴りちらし、憎々しげに乾葡萄のような彼女の双つの乳首をいきなり摘みあげた。
　「痛ッ――」
　起こしていた顔を仰けぞらせて、野梨子は呻いた。マサオはざまあみやがれ、とばかりにニヤついて、嵩にかかって指先へ力をこめる。野梨子のそこは処女らしく、硬い実のようにしこってい、潰すと中から果汁が噴きだしてきそうな錯覚を覚えた。たしかに彼女の胸は薄いのではあるが、感触は下腹や背中にタッチしているのとははっきりと違う。温かく柔軟で、肌は他の部分よりもさらに手のひらに吸いついてくるようなのだった。これはやはり女の乳ぶさであるのだろう、とマサオは確認する。男の手でこってり根気よく揉みあげ、また男の精に女体が反応するようになれば、もう少しふっくらとした隆起を見せるようになるに違いなかった。
　マサオが思いを巡らせていると、野梨子の両手を拘束した縄尻を天井から下ろした滑車に取りつけていた太田の作業が完了した。
　「さあ、立っちするんだぜ、クロスケ」
　マサオが彼女から離れると、すぐにガラガラと滑車が軋みはじめる。徐々に野梨子の交差した両手が高く吊りあげられていく。

この章の残りは有料本編でお読みください。

007　畜獄の一日・浣腸編

蜘蛛巣村簡易収容所での女性収容者の一日は、まさに奴隷になるための一日であるといっても過言ではない。昨日まで都会で生き生きと暮らしていた二人の女にとってあまりにも落差の激しい生活といえよう。

午前六時きっかりに起床ベルによって告げられた彼女たちの朝は、その一挙手一投足を鬼のような管理者たちに、まさに『管理』されるのである。

まず獄に姿を現したのはマサオだった。この事実でも彼がいちばん地位の低い管理者であるのがわかるが、若者であるだけに早朝は苦手なのか、まったく機嫌が悪かった。

「てめえら、なんだ、その態度は！」

新入りの二つの檻の中を覗くなり、マサオは怒気荒く声を張りあげるのである。昨日と同じジャージ姿の彼は手にしていた竹刀で自分の肩をこんこんと叩いている。

「お管理様が朝一番に入ってきたらちゃんと正座して出迎え、お早ようございますと土下座して挨拶するのが

常識ってもんだろうが！」
　これはこの収容所に限った話ではなく、わが国の女であれば当然の行儀なのだと説教するのだ。しかるに、立ちあがって腕組みすらし、よりによってお管理様を睨みつけている野梨子などの振る舞いは言語道断、厳罰に値する違反行為であると決めつけた。
　「クロスケ、貴様また鞭を食らいたいのか。昨日、オイオイ泣き叫んでしまいには気絶したことを忘れたのか。オ×××までブチのめされて、少しは女らしくなったかと思ったが、まだ懲りねえのかよ。オラッ、座れ！クロスケ！」
　やれやれといった表情をみせ野梨子はわざわざマサオの気に障るようにゆっくりと床に座った。鞭の痕も生々しい肌はしかしとても艶があってぴかぴか輝いているようにも見える。櫛を通していない栗色の長髪がうっすらと丸みを帯びた乳ぶさを隠すように垂れていた。
　「その髪を退けろ。胸が見えないじゃないか」
　マサオがすかさず命令する。野梨子はすらトボケてふんと横を向いた。キョロキョロと檻の中の壁を点検しているかのようである。カッときたマサオは彼女の檻の前まで大股で歩み寄り、竹刀をがーんと鉄格子に叩きつけた。
　「いい加減にしねえと半殺しの目にあわせるぞ。朝っぱらから世話を焼かせるんじゃねえ！」

髪の毛を背中へ持っていけとマサオは再び命じるのである。
「あら、こんなペチャパイでも拝みたいのかしら。よほど女性には不自由しているらしいわね」
からかいを口にして口元に笑みさえ浮かべる不敵な野梨子である。その表情こそみられなかったが、隣の真樹ははらはらのしどうしだ。そこまで刺激して大丈夫なのか。いくら作戦とはいえその勇気には感心するばかりである。
案の定、マサオはカリカリと昇せあがっているようだった。
「貴様の洗濯板なんかみるだけ吐き気がしてくるんだよ。好きでやってるんじゃねえ。ただな、管理者は収容者の健康状態を的確に把握しておく義務があるんだ。女のその日の体調は乳頭の色艶をみればはっきりわかる。お前も一応、女だからな」
マサオの言葉に野梨子も真樹も開いた口が塞がらないといった表情だ。肌や舌べろをみるならまだしも、乳首の色艶がすぐに変化するわけがない。海産物や肉の値段を決めるわけじゃあるまいし。彼らがいちいち女の誇りや人間性を苛めてくる魂胆であるのを悟らずにはいられない。徹底的に肉の塊として扱う気なのである。

この章の残りは有料本編でお読みください。
######

008　畜獄の一日・苛虐編

真樹はすべてを終えてもまだお尻を清拭される屈辱を味わわねばならなかった。股間にティッシュをもった太田の手が這いこみ、深く抉るように肛門をまさぐると、真樹の女盛りの生っ白い腰がそれにつれて前後するのであるが、男たちにはたまらない眺めであった。後手に縛られた上体は肩をがっくりとさげ、黒髪が悄然としたその表情を覆っている。上下を縄で絞りだされた乳ぶさが慄えている。

「小便まで垂れ流して、ずいぶんと派手にやらかしたな。モモコ」

石垣は彼女の頭をポンポンと叩き、ゆっくりと髪を撫でた。

「やっぱりお尻が巨きいと、出るものもデカイぜ。水が流れるかどうか、こりゃ心配だ」と太田。

からかいを浴びせてくる男たちに真樹は反発する気力もなく鼻を啜るばかり。石垣が頬にかかった髪を掻きあげ、美しい横顔を晒すと、細い華奢な首筋をくすぐるように撫でながらスベスベしたあごを掴み、持ちあげた。

「……」
　長い睫をぴったりと閉じた目尻から幾筋も涙の跡がついている。瞼も鼻の頭もうっすらとピンク色に染まり、なまめかしい色香があふれている。とても今し方、巨大な糞塊を体内から排泄したとは思えない女っぷりであった。太田のティッシュ越しの丸っこい指を肛門に感じるたびに、冴えたその額に皺を刻み、黒い柳眉をひそめている。
　「腹の中の汚いものを出しちまって、すっきりしただろう。なんだか、肌の色もパッとバラ色になった感じだぜ。やっぱり女ってのは心より身体が先だ。そう思うだろ、ン？」
　ニヤニヤしながら石垣はあごをスッスッと撫でさすると、次に手のひらで両頬を挟みこみ、真樹を正面から覗いて嗜虐の言葉を投げ掛けるのである。顔を自由勝手に触りまくられるのは、本当に屈辱的なものである。いうまでもなく対等な人間関係にはありえない扱いだ。親と幼児くらいの立場の差があるだろう。これが昂じると主人とペットの間柄になってしまう。管理者としての技術のひとつといっていい。『お前は完全に俺の手中にあるのだぞ』と随時女に思い知らせるために、彼らはよく用いている。もちろん入所二日目の真樹にとっては不快でしかなかったが、月日が経つにつれて感情も麻痺し、何も感じなくなってき、主従の関係が固定化されて心底、

奴隷根性が植えつけられてくる寸法である。
　「さ、ケツの穴もピカピカになったぜ。こんな臭い目にあわせたんだから、有難うございますの一言もいって戴こうじゃないの、モモコさんよ」
　太田は手の臭いを嗅いで大袈裟に顔をしかめながらいうのである。さすがに真樹は唇を噛みしめて横を向いたがここまで赤恥をかかされた身としては男たちに頭が上がらないのが本心である。野梨子との約束――一日二日は彼女とともにレジスタンスをする――がなかったら昨夜のように白旗をかかげて屈服していたかもしれない。
　「ちっ、糞の世話までさせておいて、礼のひとつもいえんのか。まだまだ手がかかるな、お前も」
　額から鼻の下までを手のひらでペロリとやって、石垣は不機嫌に吐き捨てた。
　真樹は立ちあがらされ、トイレから連れだされる。背後で激しく渦巻く水洗の音が彼女の羞恥を上塗りをするようだった。
　檻の前へ戻ってくるとさらに酸鼻な光景が展開されていた。
　「鳥居さんっ……」
　もちろん野梨子にも浣腸液が注入されたのだから真樹と同様の破局を彼女が迎えたであろうことは予期してはいたものの、当然、どこかのトイレに連れていかれたのだとばかり思っていたのだがそれは違っていた。彼女は

この場でオマルを跨がされて強要されていたのである。

この章の残りは有料本編でお読みください。
######

009　畜獄の一日・教化編

　皿洗いを終えた真樹。尻打ち十回をすませた野梨子。二人は縄尻を取られて畳の上へと追い立てられ、肩を触れ合わせるように並んで正座させられた。
　「う……」
　火の出るような打撃を双臀に叩きつけられた野梨子には正座さえも苦痛である。バサバサに乱れ切った豊富な頭髪が半分隠している浅黒の美貌は歪んでいる。化粧っ気がまるでないうえに洗顔も許されなかった肉の薄い細面のそれは脂汗を額の生え際や小鼻のまわりにギトつかせて、それでなくともハーフのようなアクの強い印象をいっそう募らせているようだ。
　「大丈夫？　鳥居さん」
　後手縛りの戒めを外されていない彼女を真樹が横から支える。小ぶりな双乳と華奢な二の腕にキリキリと食いこんでいる縄目に真樹は痛ましい思いで一杯であった。

気の強い気性、人をグイグイと引っ張っていく行動的な性格、それらはこの娘の年齢を五歳も十歳も上に見せているが、臭いの薄い汗はまだ二十歳そこそこのバージンである事実を思いださせる。本来なら自分以上に辛いはずのこの運命であろう。
「モモコ！　私語は厳禁だといっておろうが！」
石垣の厳しい声。正座している二人を取り囲んだ三人の管理者はゆっくりとそのまわりを移動している。それぞれ手には青々とした竹刀が握られている。言うまでもなくマサオと太田の持っている竹刀には野梨子のケツの汗がしみこんでいるわけだ。
石垣は竹刀をトンと杖のように畳について二人の女性収容者を見下ろした。
「さて、朝食が終ってから昼食までの時間は学習時間に当てられている――」
よくもこんな声を出せるものだと思われるほどの怒声に似た大声で石垣管理部長は、どうして自分たちがお前らを指導教育していけるのか、その正当性を原始の昔にまで遡ってじゅんじゅんと説きはじめるのだ。
柔道や空手の猛者の如き大男が全裸を晒し縄つきのままの正座した女の前に仁王立ちしている様は息の詰まるようなサディズムを感じさせる。それは観ているものだけの印象ではあるまい。こんな状況を強制されている二人の女こそ腸の煮え繰り返る屈辱とともに、言い知れぬ

威圧感を味わっているはずである。いくら気の強い聡明な女たちであっても、男の巨体には畏怖を抱かずにはいられない。さらに下着すら許されず、獣のように生まれたままの姿でその男たちの足元に座らされているのだ。非が彼らにあるのは明白なのだから、毅然として顔をあげ胸を張っているのが当然のはずなのに、どうしてもなおやかで女らしい白磁の撫で肩をいっそう落とし、街を歩いていれば誰もが振り返る美貌を俯かせ、線の美しい背中を丸めて、お白洲に連れてこられた下手人のような情けない姿勢になってしまっている自分に気がつくのである。それは人妻村井真樹ばかりでなく、女子大生鳥居野梨子でもそうなってしまう。改めていざという時の女の弱さ、男と女の立場の違いを思い知らされずにはおかなかった。

　がっくりと首を折ってうなだれた女たちにどこか陶然とした眼光を放っている石垣はますますテンションをあげてわけのわからない理屈をまくしたてるのである。

　この章の残りは有料本編でお読みください。
######

010　畜獄の一日・淫売修業編

　掃除洗濯が終るとやっと正午となった。それを告げられると二人はほっとするより、どっと肩にのしかかってくる疲労感に打ちのめされる。まだ半日しか過ぎていない！　その事実は何より重い。何しろあと半日、この変質者たちにイジメられるのである。とても正気でいられようがない。
　「正座！　そして土下座して昼食を恵んでいただける蜘蛛巣村の村民の皆様へ篤く礼をのべなさい」
　石垣が竹刀を振りながら怒声を発する。
　「何をするんでも土下座なんですね」
　とたまらず野梨子が口を開いた。一言くらいいってやらないと気が済まなくなったのだ。ポニーテールの彼女の顔は清潔感あふれた凛々しさを漂わせている。
　「裸の女を屈服させるのがそんなに嬉しいんですか」
　正座し、揃えた太腿に硬く握り締めた双つの拳を乗せてキッとこちらを睨んでいる。
　「うるせえんだよ。牝豚！」
　太田が憎々しげにほっぺたを摘みあげる。頬の肉が引き伸ばされるほどの容赦ない抓り。しかし野梨子も片目を閉じるように顔をしかめながらも悲鳴をこぼさない強情さを見せる。
　「これが楽しくて職業にしているんだとしたら、あなたたちは本当に人間のクズだわ！」

「なんだとぉっ、貴様！　もう一度いってみろ！」
太田は眼を三角にしていっそう指に力を入れる。
「何度でもいってやるわよっ。人間のクズよ！」
猛然と食ってかかる野梨子をみて、石垣は苦笑を漏らす。
「フフフ、クロスケ。さっきは豚鼻にされてメソメソべそ掻いてたくせに突然元気を出しやがって。初日から飛ばしていると一週間もたたずに燃料切れになるぞ。収容者にはお管理様に対する質問は許されていないんだ。土下座は理屈じゃなくて規則。お前ら未熟者は自由放任にしておくと悪い方向へ非行するんだから規則で縛っておかなきゃいかん。土下座をして感謝の言葉をいえば昼飯を与えるし、いわないのなら、また雁字搦めに縛って飯抜きだ。さあ、するのかしないのか、どっちだ、どっちでもこっちはかまわないんだぞ！」
「……」
野梨子は無言のままフンと横を向いた。

以下は有料本編でお読みください。
######